# 新制中等新國文 巻六

375.9
Mi20
資料室

41765
教科書文庫
4
810
41-1938
200030
2293

資料室
375.9
Mi20

濟定檢省部文
書科教 中學校國語漢文科 實業學校國語科
昭和十三年三十月二日

# 新制中等新國文

編纂者 文學博士 三矢重松
補訂者 國學院大學教授 御歌所寄人 鳥野幸次
補訂者 文學博士 折口信夫

株式會社
文學社

新　月

廣島大學圖書之印

広島大学
17996
図書

# 例言

一　本讀本は、國語教育が擔へる重大なる使命に鑑み、國家的精神の昂揚と、民族の自覺の上に、大いに裨益せんとするを以て、教材選擇の主眼とす。

一　本讀本は、現代文を中心とし、各時代の各種の文體に亙りてその代表的作品を網羅し、學年の程度に應じて配列を鹽梅し、以て國語常識涵養の徹底を期す。

# 目次（卷六）


一 敬神……杉浦重剛……四
二 山鹿先生を祭る文……乃木希典……一一
三 萩の家……落合直文……一三
四 秋の歌……長塚節……一六
五 高野の朝……高山樗牛……一八
六 白河殿の夜討……（保元物語）……二六
七 源三位頼政……（平家物語）……三七
八 頼家實朝の末路……（増鏡）……四四
九 箱根路……正岡子規……四九
一〇 空行く雁……（曾我物語）……五四
一一 辨慶の太刀取……（義經記）……五九
一二 仁和寺の法師……吉田兼好……六三







一三 長柄堤の訣別……坪内逍遙……六六
一四 京の雨……荻原井泉水……七七
一五 新月……北原白秋……八二
一六 美術の鑑賞……川路柳虹……八五
一七 狩野芳崖とフェノロサ……（明治美談）……九一
一八 俳句評釋……沼波瓊音……一〇一
一九 日本趣味……佐々政一……一〇五
二〇 歌御會始……鳥野幸次……一一六
二一 各民族の正月……西村眞次……一二一
二二 みくにまなび……平田篤胤……一三〇
二三 人臣の道……北畠親房……一三四
二四 刑前の書……吉田松陰……一四〇
二五 日本人の創造……尾上八郎……一四三
附錄 國語の構造

廣島大學圖書之印

# 一　敬神

杉浦重剛

承久の亂に敗れて、畏れ多くも佐渡が島にお遷りになつた順德天皇は、

いざさらば磯うつ波にこと問はん
　沖の方にはなにごとかある

と悲傷なる一首をお詠みになり、都の空をなつかしみながら、御齡四十六歳にて崩御遊ばされた。天皇は御在世中、ことの外敬神の御心深く、禁祕抄といふ宮中の事柄を述べた本をお著しになつて、その中にも、「朝廷にはいろ〳〵の作法はあるが、神事を先に行ひ、他事を後に行ふこと。朝も夕も、神を敬ふ心を怠つてはならぬ。」と仰せられてゐる。我が日本國民の精神は、神を敬ふことを第一とするところに大なる特徴

**杉浦重剛**　天台道士と號す。滋賀縣の人。教育家、國學院大學々監。大正十三年歿、年七十。

**承久の亂**　承久三年（一八八一）のこと。

**順德天皇**　第八十四代。

禁祕抄　三卷。承久末年の御著作。

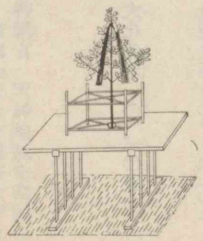




がある。

日本の神は、印度の佛や、歐米の神とは違つて、前の時代に、實際この世に住んでゐたと思はれる祖先を神として祀り、崇拜するのである。それ故に神を敬ふことは、同時に祖先を敬ふことである。

人皇第一代神武天皇は、我が大八島國を統御するに先だつて、まづ神籬を建てて神々を祀り、天富命と天種子命に命じて、祭祀と朝政を掌らしめ、人民に祭政一致の實例をお示しになつた。また御即位四年の春、詔を下して、「祖先の靈力により、今や大和を平定し、天皇の位に即くことが出來た。こゝに祖先の靈を祀り、敬神と孝の道をつくさねばならぬ。」と仰せになつた。そして鳥見山で祖先の祭を行ひ、人民に敬神の實をお示しになつたのである。



ひもろぎ

**天富命**　太玉命（齋部氏の遠祖）の孫。

**天種子命**　天兒屋命（藤原氏の遠祖）の孫。

**鳥見山**　大和國（奈良縣）生駒山の東麓。

第十代崇神天皇は、その御諡にも知られるやうに、政治を行はせられるに際して敬神を第一とされた。或年民間に傳染病が流行した時、天皇は、三種の神器を宮中に祀つてあることが天照大御神の御怒に觸れたのではなからうかとの御懸念から、新殿を作つて神器を遷し、神々をお祀りして病の靜まることをお祈りなされた。

人皇第三十六代孝德天皇の大化元年は、我が國最初の年號の制定せられた記念すべき年であつた。天皇はこの機會に、新政の方針をお定めになつた。のみならず、その頃右大臣をつとめてゐた蘇我石川麿の申し出によつて、皇太子中大兄皇子や中臣鎌足等とともに、天地の神々に對して、次のやうな御誓文を遊ばされた。「蘇我氏の横暴も、祖先の御神力によつて止み、皇位は大地のやうに不動の基礎の上に定まつ

大化元年（一三〇五）

蘇我石川麿　蘇我入鹿の從兄弟。





た。今後は、上に二つの政治なく、下に二つの心を有する者はない。もしこの誓約にそむく者あらば、神は直ちに天罰を降すであらう。」この誓をなされると同時に、人民に對しても、「先づ神々の祭を行ひ、しかる後に天下の政治を議すべし。」と仰せになつたのである。

第四十二代文武天皇は、政治上の重要なる事柄を規定した大寶律令を發布された。時は大寶元年である。この規定によつて、京都には種々の役所が建造されたが、その中で最も重要なものは、神祇官と太政官であつた。神祇官は神々の祭を掌る役所であり、太政官は政治を掌る役所である。然るに神祇官の方が高い位にあつたことは、取りもなほさず、神を祀ることが國家にとつて、最も重要なことであるといふ趣旨から出たものに外ならなかつた。今日我が國の多くの神

大寶元年（一三六一）

神祇官　天神地祇を祭祀し諸國の官社を總管す。八省百官の上に位す。

太政官　八省諸司を總管し大政を統理する役所。

社の中に、官幣社といつて、祭の日は宮内省から供物を捧げられる神社がある。この官幣社といふ名稱は、その昔神祇官でかく名づけたもので、今日では神祇官がなくなり、代つて宮内省がその任に當ることになつたのである。

第九十一代後宇多天皇の弘安四年、元の大軍が我が九州博多灣に攻めよせた時は、國民は上下ともに生色を失ひ、國家の上に一大危難が加はらうとしてゐた。その際、畏れ多くも龜山上皇は、御親ら京都の西南三里の所にある石清水八幡宮に御參拜になり、夜も徹して神々の加護をお祈り遊ばされた。その上勅使を伊勢の大神宮に遣はして、御自身の御生命と國難とをお取換へになるとまでお誓ひになつたのである。

明治天皇もまた、ことの外敬神の御心が深くあらせられ

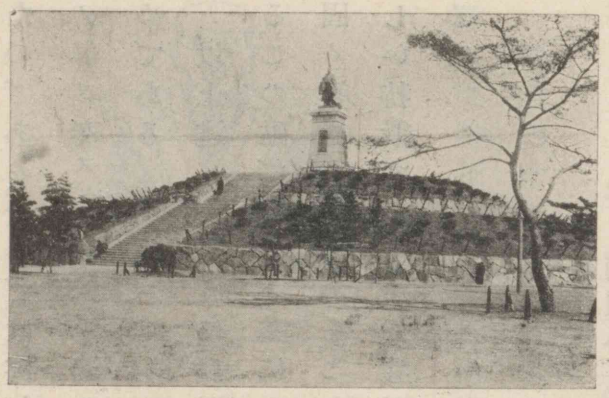
弘安四年（一二九四）

石清水八幡宮　男山ともいふ。官幣大社。京都府綴喜郡八幡に在り。





た。慶應三年正月御踐祚あらせられて間もなく、德川十五代將軍慶喜公が大政を奉還し、王政復古となるや、如何にして新政を行ふべきか日夜大御心を惱ませられた。そして廣く勤王の人々と計つて新政の方針を定め、これを明治元年三月、天地神明にお誓ひ遊ばされた。これが有名な五箇條の御誓文である。



天皇はまた氷川神社を武藏の鎭守と定め、神靈鎭祭の詔や宣教の詔等をお下しになつて、御親ら敬神の實をお示しになつた。このほか、外國へ使臣をお遣はしになる際には、必ずその

慶應三年（二五二七）

挿繪　龜山上皇御銅像（福岡市）。明治元年（二五二八）

氷川神社　官幣大社。埼玉縣（武藏國）大宮町にあり。

使臣を宮中の八咫鏡を祀つてある賢所に奉拜させ、立派にその任務を果すことが出來るやう、神にお祈をせしめられたのである。今日では毎年一月四日の御政始には「先ヅ神宮ノ事ヲ奏ス。」といふ事があるが、これは大寶令時代からの定めである。

以上述べたやうに、我が國は昔から敬神の風が盛んである。この點では上下共に心を同じくし、神國としての礎石を固く築き上げてゐる。これが我が國の他國と異なる最も著しい特徴であり、また我が國家の力の中樞をなすものである。

—(國體讀本)—





## 二　山鹿先生を祭る文

乃木希典

明治四十年十二月二十九日、陸軍大將乃木希典、謹み誠を致して贈正四位素行山鹿先生の靈を祭る。先生德一世に高く、識古今に踰え、學問該博議論卓拔、夙に國體の精華を發揮し、中外の別を明かにし、名分を正し、士道を說き、志經綸に存し、才文武を兼ぬ。而して不幸世に遇はず、轗軻困頓終に偉大の抱負を實用に施す能はずして逝けり。惜しむべきかな。然れども先生の學德當世を籠罩し、業を受け益を請ふ者前後數千人の多きに上り、且つ先生既に歿して其の兵學盛んに行はれ、遺著

**乃木希典**　山口縣（長門國）長府に生る。陸軍大將。伯爵。學習院長。大正元年薨、年六十四。

山鹿素行　名は高祐。奥州會津の人。兵學山鹿流の祖。貞享二年（一三四五）歿、六十四。

挿繪　山鹿素行肖像。

先生の遺著　その主なるものは、「武教要錄」「武經全書」「治教餘錄」「聖教要錄」等。

永く存し、風を聞きて興起する者亦尠しとせず、曩に先生の遺著畏くも乙夜の覽に達し、今又特に正四位を贈らせ給へり。嗚呼聖慮宏大、其の學德の世道人心に裨益あるを叡感あらせられ、優恩先哲に及ぶ。洵に昭代の盛事と稱し奉るべし。希典幼時師父の教に從ひ、先生の遺著を讀み、窃に高風を欽仰し、以て武士の典型となさん事を期せしに、不肖殘軀　聖明に遭遇し、涓埃の勞なくして叨りに寵眷を荷ふもの、實に先生の遺訓を服膺するの賜ものと謂はざるを得ず。今昔を俯仰して感慨殊に切なり。茲に花一朶香一炷を奠し、先生の靈を祭る。尚くは之を饗けよ。

―（乃木院長記念錄）―

乙夜の覽　乙夜は今の午後十時。天子の讀書をいふ。海錄碎事に、「太宗曰ク、若シ甲夜ニ事ヲ視、乙夜ニ書ヲ觀ザレバ云々」とあり。





## 三　萩の家

落合直文

おのが庭に一もとの萩あり。秋ごとにその色いとふかく、枝などのしげれるさま、いみじううるはし。朝におきてそれをながめ、夕に立ち出でてこれにうち對ひたるこゝち、たとふべきものなし。おのれ、家の名を萩の家とよべるもこの萩のためのみ。他にまたなにのこゝろかあらむ。一とせ飯田町に住みけるに、枝いたくおひしげりて、花もやゝほころびそめたり。明日、明後日は咲きのさかりならむといひあへりしに、俄に野分の風吹きたちて、雨さへふりそはりぬ。おのれは妹をかたらひ、共に庭におりたちてそを防ぎぬ。竹もてこの戸はづせ。」など、うちどよめきたるその聲、今なほ耳にあり。その後、ほどなく、妹は世になき人となりぬ。

**落合直文**　萩の家主人と號す。仙臺の人。國文學者。歌人。明治三十六年歿、年四十三。

飯田町　東京市麹町區の町名。

さだめなき旅のならひ、家をうつすこと、一とせに二たび三たびは常のことなり。佐土原町・拂方町・大門町など、幾度かうつりたり。されどその萩ははなたず。今の掃除町の庭にあるもやがてその萩なり。その萩は、秋ごとに花咲けり。その花その色は舊時にかはることなし。たゞその萩にうちむかふ我がこゝろは、舊時にくらぶればいたくことなり。そは妹のこの世にありしほどは、はぎの花はおのが心を喜ばしめしに、妹の亡せにし後は、おのが心をかなしましむるが如し。さきの萩と今の萩とかはりあるか。いかでかその萩にかはりあらむ。さては、よろこばしと言ひ、悲しと言ふは、皆わが心からなるべし。

或る年九月の末つかた、朝九時ごろより、空のけしき、たゞならずと思ひしに、雨ふり出で、風吹きたりて、その勢おど

佐土原町・拂方町　共に東京市牛込區の町名。
大門町・掃除町　共に東京市小石川區の町名。掃除町は、今、八千代町と改む。





ろおどろしく、ひるつかたより、いよ〳〵はげしうなりぬ。おのれ、高等中學校にありしが、萩のこと、心にかゝらぬにはあらねど、授業ひまなく、午後二時ばかり家に歸りぬ。さて庭を見るに、垣たふれ壁くづれ、例の萩など目もあてられず。あはれ、妹の世にありしころは、風も防ぎ雨もふせぎてありしに、けふかくはかなくなりたるは、げに口惜しき限りなりとて、その夜は寢もやらず。さは言へ、風に吹きをられたりとて、その萩の幾部分は必ずうるはしう咲きいでなむ。ことしの秋はさかずとも、またこむ秋は必ず咲きなむ。たゞかなしきは、かのかへらぬ人の上にこそ。次の日、この文をかきてありしに、例の下枝のあたり朝露こぼれたり。萩もまた心なきにはあらざらむ。

―（落合直文集）―

高等中學校　今の第一高等學校。

## 四 秋の歌

長塚節

小夜深にさきて散るとふ稗草のひそやかにして秋さりぬらむ

馬追蟲の髭のそよろに來る秋はまなこを閉ぢて想ひ見るべし

唐黍の花の梢にひとつづつ蜻蛉をとめて夕さりにけり

おしなべて木草に露を置かむとぞ夜空は近く相迫り見ゆ

青桐は秋かもやどす夜されればさわらさわらと其の葉さやげり

**長塚節** 茨城縣の人。歌人、小說家。大正四年歿、年三十七。





芋の葉にこぼるる玉のこぼれこぼれ子芋は白く凝りつつあらむ

此の宵はこほろぎ近し廚なる笊の菜などに居てか鳴くらむ

蝕ばみてほほづき赤き草むらに朝は嗽ひの水すてにけり

芋がらを壁に吊せば秋の日のかげり又さしこまやかに射す

しめやかに雨の淺夜を籠ながら山茶花のはなこぼれ居にけり

—(長塚節歌集)—

# 五 高野の朝

高山樗牛

霞に閉されたる八つの谷間には夜の尙さまよひて、梢を鳴らす山の嵐に百鳥の聲猶眠れるが如くなれども、空のけはひ、はやほの〴〵と明けなむとす。遠近の僧房・庵室に漸く聞ゆる經の聲、鈴の響、うき世離れたる物音に、曉の靜けさ一入深し。まことや帝城を離れて二百里、鄕里を去りて無人聲、同じ土ながら世を隔てたる高野山、眞言祕密の靈跡に感應の心も轉た澄みぬべし。竹苑椒房の昔に變り、破れ頽れたる僧庵に如何なる夜をか過し給へる、露深き枕邊に夕の夢を殘し置きて起き出で給へる維盛卿、重景も共に立ち出でて、庵の主や何處と打ち見やれば、此方の一間に、瀧口入道は終夜思ひ煩ひて顏の色たゞならず、肅然として佛壇に向ひ、眼

**高山樗牛** 名は林次郎。山形縣の人。文學博士。文藝批評家。明治三十五年歿、三十二。

高野の朝 平重盛〻臣瀧口入道齋藤時頼所感有りて平氏全盛の時剃髮して高野山に入る。平氏沒落後維盛落人となり一臣重景を從へて夜中瀧口を高野に訪ふ。維盛寢に就き、瀧口獨り感慨胸に迫つて眠る能はず。既にして夜明く。

高野山 和歌山縣(紀伊國)の西北部の山。山上に眞言宗高野派の本山金剛峰寺あり。

瀧口入道 齋藤時頼の別稱。平重盛の臣。もと瀧口の侍なりしゆゑに、この稱あり。瀧口の侍とは





を閉ぢて祈念の體、心細くも立ち上る一縷の香煙に身を包ませて、爪繰る珠數の音冴えたり。佛壇の正面には故內府の靈位を安置しあるに維盛卿も重景も、これはとばかり拜伏し、共に祈念をぞ凝らしける。

やがて看經終りて後、維盛卿は瀧口に向ひ「さても殊勝の事を見るものかな。今廣き日本國に淨蓮大禪門の御靈位を設けて、朝夕の回向をなさむもの、瀧口汝ならで外に其の人ありとも覺えぬぞ。思へば、先君の被官、內人幾百人と其の數を知らざりしが、世の盛衰につれて、多くは身を浮草の西東、舊の主人に弓引くものすらある中に、世を捨ててさへ昔を忘れぬ汝が殊勝さよ。其れには反して、世に落人の見る影もなき今の我が身、草葉の蔭より先君のさぞかしいふかひなきものと思し給はむ。世に望なき維盛が心にかゝるは此の

往時禁中の警衛にあたりし武士の稱。

故內府 內大臣平重盛。

維盛 重盛の嫡子。

淨蓮 重盛の法名。

被官 直屬の部下。

事一つ。」と言ひつゝ涙を拭ひ給ふ。

瀧口は默然として居たりしが、暫くありてきつと面を擧げ、襟を正して維盛卿の前に恭しく兩手をつき、「さほど先君のこと御心に懸けさせ給ふ程ならば、何とて斯かる落人にはならせ給ひしぞ。」意外の一言に維盛卿は膝押し進めて、「何と云ふ。」「御驚きはさることながら、御身のため又御一門のため、御恨の程を身一つに忍びて瀧口が申し上ぐること、一通り御聞きあれ。そも君は正しく平家の嫡流にておはしまさずや。今や御一門の方々屋嶋の浦にありて、生死を一にし存亡を共にして、恢復のこと叶はぬまでも、押し寄する源氏に最後の一矢を酬いむと、日夜肝膽を碎かるゝこと、申すも中中にこそ候へ。そも壽永の初め目指す敵の旗影も見て、都を落ちさせ給ひしさへ、平家末代の恥辱なるに、せめて此の上

御一門の方々屋島にありて云々　壽永三年（一八四四）二月、平宗盛等摂津一の谷の戰に大敗するや、安德天皇を奉じて讃岐に逃れ、城を屋島（讃岐の北部の半島）に築きてこれに據る。翌文治元年、源義經、平氏を屋島に破る。





は一門の將士と御座船を枕にして、屍を西海の波に浮かべ給はばこそ、あつぱれ武門の最期潔しとも申すべけれ。然るを君には家族故舊を波濤の上に振り捨てて、妻子の情に迷はせられ、斯く見苦しき落人に成らせ給へるこそ心外千萬なれ。明日にも屋嶋沒落の曉に、御一門殘らず雄々しき最期を遂げむ時、君一人は如何に成らせ給はむ御心に候ぞや。若し又關東の手に捕はれ給ふこともあらむには、君こそは妻子の愛に一門の義をすてて、死すべき命を卑怯にも遁れ給ひしよと、世の口々に嘲られて、京・鎌倉に立つ浮名をば、君には風やいづこと聞き給はむずる御心に候や。申すも恐れある事ながら、御父上重盛卿は智仁勇の三德を具へ給ひし古今の名器、敵も身方も共に敬慕する所なるに、君には其の正嫡と生まれ給ひて、先君の譽を傷けむこと、口惜しくは思さ

壽永のはじめ　壽永二年（一八四三）のこと。

ずや。本三位の卿の擒となりて京・鎌倉に恥を曝しゝこと君にも口惜しう思し給ふ程ならば、何とて無官の大夫が健げなる討死を譽とは思ひ給はぬ。あはれ君、先君の御事一門の恥辱となる由を思ひ給はば、願はくは一刻も早く屋嶋へ歸らせ給へ。瀧口、君を宿し參らする庵も候はず。あゝ斯くつれなくもてなし參らするも、故内府が御恩の萬分の一に答へむ瀧口が微衷、詮ずる所君の御爲を思へばなり。御恨の程もさこそと思ひやらるれども、今は言ひ解かむ術もなし。何事も宣はで只々屋嶋へ歸らせ給ひ、御一門と生死を共にし給へ。」と、忌まず憚らず涙ながらに諫むる瀧口入道、維盛卿は至極の道理に面目なげにさし俯き、狩衣の御袖を絞りかねけるが、言葉もなくて次の室に立ち入り給ふ。跡見送りて瀧口は、其の儘がばと打ち伏して、男泣きにぞ泣き沈みける。

本三位　平重衡のこと。清盛の子。三位左近衛中將。一の谷の戰に、義經の擒となりて京都に送らる。

無官大夫　平敦盛のこと。





よもすがら恩義と情との巷に立ちて何れをそれと決しかねたる瀧口が、思ひ極めたる直諫に、さすがに御身の上を恥ぢらひてか、維盛卿は言葉もなく一間に入り給ひぬ。あゝ思へば君が馬前の水つぎ執りて「大儀ぞ。」との一聲を此の上なき譽と、人も思ひ我も誇りし日もありしに、如何に末の世とは言ひながら、露忍ぶ木蔭もなく彷徨ひ給へる今の御身の痛はしさよ。快き一夜の宿もせず、面のあたり主を恥づかしめて忠義顏なる我が身はそも如何なる因果ぞや。末頼みなき落人故の此のつれなさと、我を恨み給はむことのうたてさよ。あはれ故内府在天の靈も照覽あれ。血を吐くばかりの瀧口が胸の思ひ、聊か二十餘年の御恩に報ゆるの寸志にて候ぞや。

松杉暗き山中なれば、傾き易き夕日の影、はや今日の春も

くれなむず。姿ばかりは墨染にして、君が行く末を嶮しき山路に思ひ較べつゝ、溪間の泉を閼伽桶に汲み取りて立ち歸る瀧口入道、庵の中を見れば、維盛卿も重景も何處にか行き給ひけむ、影もなし。さては我が諫を納れ給ひて屋嶋に歸らせ給ひつるか。さるにても我に一言の御告げなき訝しさよと、四邊を見廻せば、ふと眼にとまる經机の上にある薄色の折紙。取り上げ見れば維盛卿の筆と覺しく、水莖の跡鮮かに走りがきせる三首の和歌、

かへるべき梢はあれどいかにせむ
風をいのちの身にしあなれば

濱千鳥入りにし跡を知らせねば
しほのひる間にたづねてもみよ

いづくとも知らぬ逢ふ瀨のもしほ草

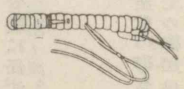




書きおくあとを形見ともみよ
あはれ御身を落葉と觀じ給ひて、元の枝をば屋嶋とは見給ひけむ。入りにし跡を何處とも知らせぬ濱千鳥、潮干の磯に何を尋ねよとや。さてはとばかり瀧口は、折紙の面を視つめつゝ暫し茫然として居たりしが、何思ひけん、豫め祕藏せし昔の名殘の小鍛冶の鞘卷、あわたゞしく取り出し、衣の袖に隱し持ちて麓の方へぞ急ぎける。

—(瀧口入道)—

鞘卷



## 六　白河殿の夜討

白河殿には、左大臣殿武者所の親久を召されて、「内裏の様見てまゐれ。」と仰せければ、親久卽ち馳せ歸り、「官軍既に寄せ候。」と申しも果てねば、先陣既に馳せ來る。そのとき鎭西の八郎申しけるは、「爲朝が千度申しつるはこゝ候、こゝ候。」と忿りけれども、力およばず。爲朝を勇ません爲にや、俄に除目行はれて、藏人たるべき由仰せけり。八郎、「これは何といふ事ぞ。敵既に寄せ來るに、方々の手分けをこそせられんずれ、たゞ今の除目物騷なり。人々は何にもなり給へ。爲朝は今日の藏人と呼ばれても何かせん。只もとの鎭西の八郎にて候はん。」とぞ申しける。

さる程に、下野守義朝は二條を東へ發向す。安藝守淸盛も

白河殿　崇德天皇の御所。
左大臣殿　藤原頼長。
武者所　院（上皇）の御所を警衛する下北面の武士の詰所。
内裏　後白河天皇の御所、卽ち高松殿。
鎭西の八郎　源爲朝。爲義の第八子。
除目　中古、大臣以外の諸臣を官職に任ぜられし公事。
藏人　至尊の御衣・御膳より總ての御起居に供奉し、諸儀式を始め宮中一切のことを掌りし役。



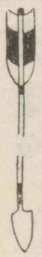


同じく續いて寄せけるが、明くれば十一日、東塞がりなる上、朝日に向つて弓引かんことおそれありとて、三條へうち下り、河原を馳せ渡して、東の堤を北へ向つてぞ歩ませける。下野守は大炊御門河原に、前に馬の驅場を殘して、河より西に、東頭に控へたり。

新院の御所にも、敵すでに西南の河原に鬨をつくつて攻め來れば、爲義以下の武士、各固めたる門々より驅け出でけり。判官が手には、四郎左衞門頼賢と八郎爲朝と先陣を爭ひて、すでに珍事に及ばんとす。頼賢思ひけるは、「今、子どもの中には、我こそ兄なれば、今日の先陣をば誰かは驅けん。」といふ。爲朝は又、「恐らくは、弓矢取つても打物取つても、我こそあらめ。その上判官も軍の奉行を仕らせらるゝ上は、我こそ先陣を驅けめ。」と論じけるが、しばらく思案して、兄達をも蔑にす

十一日　保元元年（一八一六）七月。
新院　崇德上皇。
判官　六條判官爲義。
頼賢　爲義の第四子。

るえせ者とて親に不孝せられしが、たま〳〵勘當赦されたる身の、父の前にて兄と先を論ぜんこと惡しかりなんと思ひければ、「所詮たれ〳〵も驅けさせ給へ。强からん所をば、幾度も承つて支へ奉らん。」とぞ申しける。四郎左衞門これを聞きも咎めず、卽ち西の河原へ出で向ふ。紺叢濃の直垂に、月數といふ鎧の、朽葉色の唐綾にて縅したるを着、二十四さしたる大中黑の矢、頭高に負ひなし、重籐の弓眞中取つて、桃花毛なる馬に鏡鞍置いてぞ乘つたりける。大炊御門を西へ向つて防ぎけるが、「こゝを寄するは源氏か、平氏か。名告れ聞かん。かく申すは、六條判官爲義が四男、前の左衞門尉賴賢。」とぞ名告りける。河向ひに答へていはく、「下野守殿の郎等に、相模國の住人、須藤刑部丞俊通、子息瀧口俊綱、先陣を承つて候。」と申せば、「さては一家の郎等ござんなれ。汝を射るにあらず、大將



月數　源氏相傳の重寶たる八領の鎧の一。

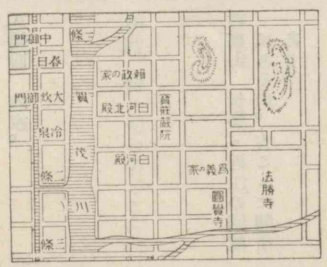
大中黑の矢。





軍を射るなり。」とて、川越しに矢二つ放つ。夜中なれば、誰とは知らず、矢面に進んだる者二騎射落されぬ。四郎左衞門も內兜を射させてひき退く。下野守は矢合に郎等を射させて、安からず思はれければ、すでに驅けんとし給へば、鎌田次郎正淸轡に取りついて、「こゝは大將軍の驅けさせ給ふ所にて候はず。千騎が百騎、百騎が十騎になりてこそ、打ちも出でさせ給はめ。」と申しけれども、なほ驅けんとし給ふ間、步立の兵八十餘人ありけるを招き寄せて、この由をいひ含め、大將軍を守護せさせ、正淸馬に打乘つて、眞先にこそ進みけれ。

安藝守は二條河原の、川より東、堤の西に、北へ向つて控へたり。その勢の中より五十騎ばかり先陣に進んで押寄せたり。「こゝを固めたまふは誰人ぞ、名告らせ給へ。かう申すは、安藝守殿の郎等に、伊勢國の住人、古市の伊藤武者景綱、同じき




白河殿附近の圖。

伊藤五、伊藤六。」とぞ名告りける。八郎これを聞き、「汝が主の清盛をだに合はぬ敵と思ふなり。平家は柏原天皇の御末なれども、時代ひさしく成り下れり。源氏は誰かは知らぬ、清和天皇より爲朝までは九代なり。六孫王より七代、八幡殿の孫六條判官爲義が八男、鎭西八郎爲朝ぞ。景綱ならばひき退け。」とぞ宣ひける。景綱、「昔より源平兩家天下の武將として、違勅のともがらを伐つに、兩家の郎等、大將を射ること互にこれあり。同じ郎等ながら、公家にも知られ參らせたる身なり。その故は、伊勢國鈴鹿山の强盜の張本小野の七郎を搦めて奉り、副將軍の宣旨を蒙りし景綱ぞかし。下郎の射る矢、立つか立たぬか、御覽ぜよ。」とて、よつ引いて射たれども、爲朝これを事ともせず、「合はぬ敵と思へども、汝が詞のやさしさに、矢一つ賜はらん、受けて見よ。且は今生の面目、又は後生の思出にも

柏原天皇　第五十代桓武天皇。柏原陵に葬り、よつて柏原天皇と申す。

六孫王　源經基のこと。清和天皇の第六皇子貞純親王の長子。

八幡殿　義家。

鈴鹿山　伊勢・近江の國境にある山。古こゝに關所あり。





せよ。」とて、三年竹の節近なるを少しおし磨いて、山鳥の尾を以て作いだるに、七寸五分の丸根の、箙中過ぎて箙代のあるをうち食はせ、しばし保つてひようと射る。眞先に進んだる伊藤六が胸板・押附かけず射通し、餘る矢が、伊藤五が射向の袖に裏かいてぞ立つたりける。六郎は矢場に落ちて死にけり。

伊藤五この矢を折りかけて、大將軍の前に參つて、「八郎御曹司の矢御覽候へ。凡夫の所爲とも覺え候はず。六郎既に死に候ひぬ。」と申せば、安藝守を始めてこの矢を見る兵共、皆舌を振つてぞ恐れける。景

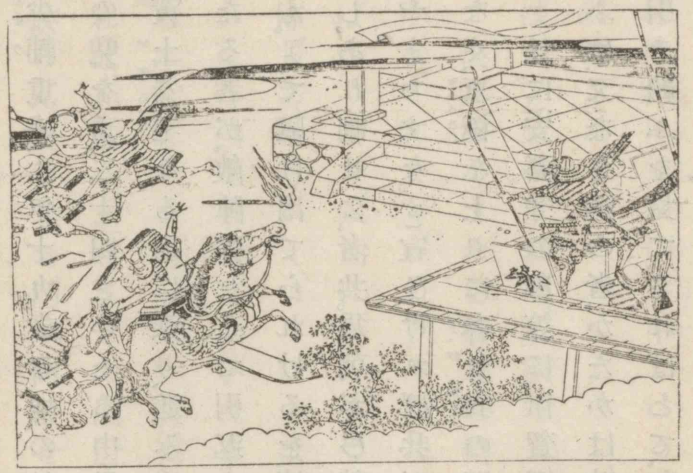
挿繪　鎧・兜の名どころ。

綱申しけるは、「かの先祖八幡殿、後三年の合戰の時、出羽國金澤の城にて武則が申しけるは、『君の御矢に中るもの、鎧・兜を射通されずといふことなし。抑、君の御弓勢は慥に拜み奉らばや。』と望みければ、義家革よき鎧三領重ねて、木の枝に懸けて、裏表六かさねを射通し給ひければ、鬼神の變化とぞ恐れける。これよりいよ〳〵兵共歸服しけりと、申し傳へて聞くばかりなり。眼前にかゝる弓勢も侍るにや。あな、恐ろし。」とぞ怖ぢあへる。かく口々にいはれて、大將宣ひけるは、「必ず清盛がこの門を承つて向ひたるにもあらず、何となく押寄せたるにてこそあれ。何方へも寄せよかし。さらば東の門か。」とあれば、兵みな、「それもこの門近く候へば、もし同じ人や固めて候らん。たゞ北の門へ向はせ給へ。」といへば、「さもいはれたり。今は程なく夜も明けなんず。然れば、小勢に大勢が驅けたてられんも見苦しかりなん。」とて引き退くところに、嫡子中務少輔重盛、生年十九歳、赤地の錦の直垂に、澤瀉縅の鎧に、白星の兜を着、二十四さいたる中黑の矢負ひ、二所籐の弓持つて、黃土器毛なる馬に乘り、進み出でて、「勅命を蒙りて罷り向ひたる者が、敵陣强しとて引返す樣やあるべき。續けや、若者ども。」とて驅け出でられけるを、清盛これを見て、「有るべうもなし。あれ制せよ、者共。爲朝が弓勢は目に見えたる事ぞかし。あやまちすな。」と宣ひければ、兵ども前に馳せ塞がりければ、力なく、京極を上りに春日表の門へぞ寄せられける。

茲に安藝守の郎等に、伊賀國の住人山田小三郎伊行といふは、又なき剛の者、かたかは破りの猪武者なるが、大將軍の引き給ふを見て、さればとて、矢一筋に恐れて、向ひたる陣を引くことやある。たとひ筑紫の八郎殿の矢なりとも伊行が

後三年の合戰　前九年の役の誤。
金澤の城　羽後國（秋田縣）金澤町にあり。
武則　清原氏。前九年の役に、頼義・義家に加勢す。

鎧はよも通らじ。五代傳へて、軍に逢ふこと十五箇度、我が手に取つても、度々多くの矢どもを受けしかど、未だ裏をばかゝぬものを。人々見たまへ。八郎殿の矢一つ受けて、物語にせん。」とて驅け出づれば、「烏滸の功名はせぬには如かず。無益なり。」と同僚ども制すれども、もとよりいひつる言葉を返さぬ男にて、「夜明けて後に、傍輩の、『八郎の、いで、矢目見ん。』といはんには、何とかその時答ふべき。然れば日頃の功名も失せなんことの無念なれ



挿繪　爲朝の弓勢。

矢目―矢傷





ば、よし〳〵、人は續かずともおのれ證人に立つべし。」とて、下人一人相具して、黑革縅の鎧に、同じ毛の五枚兜を猪頸に着、十八さいたる染羽の矢負ひ、塗籠籐の弓持ちて、鹿毛なる馬に黑鞍置いてぞ乘つたりける門前に馬をかけ据ゑ、「物その物にはあらねども、安藝守の郎等、伊賀國の住人山田小三郎伊行、生年二十八。堀河院の御宇、嘉承三年正月二十六日對馬守義親追討の時、故備前守の眞先驅けて、公家にも知られ奉りたりし山田の莊司行末が孫なり。山賊强盜を搦め捕る事は數を知らず。合戰の場にも度々に及んで功名仕つたる者ぞかし。承り及ぶ八郎御曹司を一目見奉らばや。」と申しければ、爲朝、「一定、彼奴は引き設けてぞ言ふらん。一の矢をば射させんず。二の矢を番はん所を射落さんず。同じくは矢の溜らん所を、我が弓勢を敵に見せん。」と宣ひて白蘆毛なる馬に金

嘉承三年（一七六八）。

義親　源義家の第二子。故備前守　平正盛。清盛の祖父。

覆輪の鞍置いて乘つたりけるが、驅け出でて、「鎭西の八郎これに在り。」と名告り給ふ所を、もとより引き設けたる箭なれば、弦音高く切つて放つ。御曹司の弓手の草摺を縫ひざまにぞ射切つたる。一の矢を射損じて二の矢を番ふ所を、爲朝よつ引いてひようと射る。山田小三郎が鞍の前輪より、鎧の前後の草摺を尻輪懸けて、矢先三寸餘りぞ射通したる。暫しは矢にかせがれて溜る樣にぞ見えし、卽ち弓手の方へ眞逆さまに落つれば、鏃は鞍に留まつて、馬は河原へ馳せ行けば、下人つと馳せ寄り、主を肩に引つかけて、御方の陣へぞ歸りける。寄手の兵これを見て、いよ〳〵この門へ向ふ者こそなかりけれ。

—（保元物語）—

**保元物語**　三卷。主として保元の亂の顚末を記した戰記物語。作者未詳。





## 七　源三位頼政

抑、この源三位入道頼政は、攝津守頼光に五代、三河守頼綱が孫、兵庫頭仲政が子なりけり。保元の合戰の時も、味方にて先をかけたりしかども、させる賞にも預らず、また平治の逆亂にも、既に親類を棄てて參じたりしかども、恩賞これおろそかなりき。大内の守護にて年久しうありしかども、昇殿をば許されず。年長け齡かたぶいて後、述懷の和歌一首詠みてこそ、昇殿をばしたりけれ。

人知れぬ大内山の山守は
　木がくれてのみ月を見るかな

これによつて昇殿を許され、正下四位にて暫くありしが、なほ三位を心にかけつゝ、

**源三位頼政**　治承四年（一八四〇）宇治平等院に自殺す。年七十七。

のぼるべきたよりなき身は木の下に
しひをひろひて世をわたるかな

さてこそ三位はしたりけれ。やがて出家して、源三位入道頼政とて、今年は七十七にぞなられける。この人一期の高名と覺しきことは、多きが中にも、ことには仁平のころほひ、近衞院御在院の御時、主上夜な夜なおびえさせ給ふことあり。有驗の高僧・貴僧に仰せて、大法・祕法を修せられけれども、その驗なし。御惱は丑の剋ばかりの事なるに、東三條の森の方より、黑雲一叢たち來つて、御殿の上に蔽へば、必ずおびえさせ給ひけり。これによつて公卿僉議ありけり。

さんぬる寛治のころほひ、堀河院御在位の御時、主上しかの如くおびえ魂極らせ給ひけり。その時の將軍義家朝臣、南殿の大床に候はれけるが、御惱の刻限に及んで、鳴弦すること三度の後、高聲に「前の陸奥の國守源義家」と名のりたりければ、聞く人、身の毛よだつて御惱必ず怠らせ給ひけり。然れば、先例にまかせて、武士に仰せて警固あるべしとて源平兩家の兵の中を選ませられけるに、この頼政をぞ選び出されたりける。その時は未だ兵庫頭にて候はれけるが、申されけるは、「昔より朝家に武士置かるゝ事は、逆反のものを退け、違勅の輩を亡さんが爲なり。目にも見えぬ變化のもの の仕れと仰下さるゝこと、未だ承り及ばず。」と申しながら、勅宣なれば、召に應じて參內す。

頼政、頼みきつたる郎等遠江國の住人猪早太に母衣の風切はいだりける矢負はせて、たゞ一人ぞ具したりける。わが身は二重の狩衣に、山鳥の尾を以てはいだりける鋒矢二筋、滋籐の弓に取り添へて、南殿の大床に伺候す。頼政、矢二つ手



しひ　椎（シヒ）に四位（シヰ）を懸けていへり。

今年　治承四年（一八四〇）此の年頼政は、以仁王の令旨を奉じて兵を擧ぐ。

仁平　近衞天皇の御代の年號。（一八一一—一八一三）

近衞院　第七十六代。近衞天皇。

丑の剋　今の午前二時頃。

寛治　堀河天皇の御代の年號（一七四七—一七五三）

堀河院　第七十三代。堀河天皇。



南殿　紫宸殿。

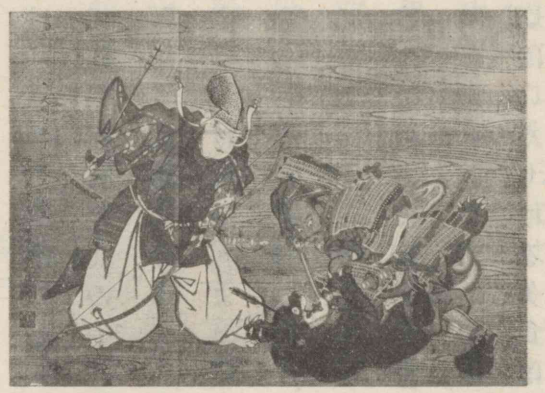
母衣の風切はいだる矢

挾みけることは、雅頼卿、その時は未だ左小辨にておはしけるが、「變化のものつかまつらんずる仁は、頼政ぞ候らむ。」と、選び申されたる間、一の矢にて變化のものの射損ずるほどならば、二の矢には、雅頼の辨のしや頸の骨を射んとなり。案の如く、日頃人の申すに違はず、御惱の刻限に及んで、東三條の森の方より、黒雲一叢立ち來つて御殿の上にたな引いたり、頼政きつと見上げたれば、雲の中にあやしきものの姿あり。射損ずるほどならば、世にあるべしとも覺えず。さりながら矢取つてつがひ、南無八幡大菩薩と、心の中に祈念して、よつぴいて、ひやうと放つ。手ごたへして、はたとあたる。「得たりやおう。」と、矢叫びをこそしてんげれ、猪早太つと寄り、落つる所を取つて押へ、柄も拳も透れ透れと、續け様に九刀ぞ刺したりける。その時、上下てんでに火をともして、これを御覽じ見給ふに、頭は猿、軀は狸、尾は蛇、手足は虎の如くにて、鳴く聲鵺にぞ似たりける。おそろしなどもおろかなり。

主上御感のあまりに、獅子王と申す御劍を下さる。宇治の左大臣殿之を賜はりついで、頼政に賜はんとて、御前の階を半ばばかり下りさせ給ふ折節、頃は卯月十日あまりの事なれば、雲井に郭公、二聲三聲おとづれて通りければ、左大臣殿、

ほとゝぎす名をも雲居にあぐるかな

と仰せられかけたりければ、頼政右の膝をつき、左の袖をひろげて、月を少しそば目にかけつゝ、



挿繪　頼政の怪獣退治の圖。（高嵩谷筆）

雅頼　藤原氏。

宇治の左大臣　藤原頼長。

弓張月のいるにまかせて

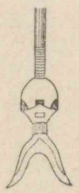
とつかまつり、御劔を賜はりて罷り出づ。この頼政卿は、武藝にも限らず、歌道にもまたすぐれたりとぞ、時の人々感じあはれける。さてかの變化のものをば、うつぼ船に入れて流されけるとぞ聞えし。

また應保の頃ほひ、二條の院御在位の御時鵺といふ化鳥、禁中に鳴いて、屢、宸襟を惱まし奉ることありけり。然れば先例にまかせて、頼政をぞ召されける。頃は五月二十日あまり、まだ宵のことなるに、鵺たゞ一聲おとづれて、二聲とも鳴かざりけり。目ざすとも知らぬ闇ではあり、姿形も見えざりければ、矢壺をいづくとも定め難し。頼政が謀に、まづ大鏑取つてつがひ、鵺の聲したりける内裏の上へぞ射上げたる。鵺、鏑の音に驚いて、虚空にしばしぞひらめいたる。次に小鏑取つ

弓張月のいる　いるは「射る」に「入る」をかけたり。

應保　二條天皇の御代の年號。（一八二一―一八二二）

二條の院　第七十八代。二條天皇。



鏑矢





てつがひ、ひいふつと射切つて、鵺とならべて、前にぞ落したる。禁中さゞめき渡つて、頼政に御衣をかづけさせおはします。今度は大炊御門の右大臣公能公の賜はりついで、頼政にかづけさせ給ふとて、「昔の養由は、雲の外の雁を射き。今の頼政は雨の中の鵺を射たり。」とぞ感ぜられける。

五月やみ名をあらはせるこよひかな

と仰せられかけたりければ、頼政、

たそがれ時も過ぎぬとおもふに

とつかまつり、御衣を肩にかけて罷り出づ。その後、伊豆國賜はり、子息仲綱受領になし、わが身三位して、丹波の五箇の庄、若狭の東宮川を知行してさておはすべかりし人の、よしなき謀叛おこいて、宮をも失ひまゐらせ、わが身も子孫も亡びぬるこそうたてけれ。

―（平家物語）―

公能　藤原氏。

養由　支那春秋時代の楚の有名な射術の名人。

伊豆　静岡縣。

丹波　京都府。

若狭　福井縣。

# 八　頼家・實朝の末路

土御門院の御位のはじめつかた、正治元年正月、頼朝はあづまにて頭おろして、同じき十三日、年五十三にてかくれにけり。

治承四年より天の下にもちゐられて二十年ばかりや過ぎぬらむ。北の方は、北條四郎時政が女なり。その腹にをのこ二人あり。兄をば頼家といひ、弟をば實朝といふ。大將かくれて後、兄はやがて立ち繼ぎて、建仁元年六月二十二日從二位、同日將軍の宣旨を賜はる。又の年左衛門督になさるゝされど、少し輕き心ばへなどありて、やう〳〵兵ども背き背きにぞなりにける。

時政は遠江守といひて、故大將のありし時より私の後見

土御門院　第八十三代。土御門天皇。正治元年　（一八五九）

建仁元年　（一八六一）

故大將　頼朝のこと。建久元年、右近衛大將に任ぜらる。





なりしを、まして今は孫の世なれば、いよ〳〵身重く勢そふことかぎりなくて、世の中心のまゝなり。子二人あり。太郎は宗時、次郎は義時といへり。次郎は心も猛く魂まされる者にて、左衛門督をばふさはしからずおもひて、弟の實朝の君に附き從ひて、思ひ構ふることなどもありけり。左衛門督は日にそへて人にもそむけられ行くに、いといみじき病をさへして、建仁三年九月十六日、年二十二にて頭おろす。世の中のこり多く、何事もあたらしかるべき齢なれば、さこそ口惜しかりけめ。をさなき子の一萬といふにぞ世をば讓りけれど、心を寄する者なし。入道はかの病つく

挿繪　頼家の畫像。

ろはむとて、鎌倉より伊豆の國へいでゆあびに越えたりける程に、かしこの修善寺といふ處にて遂に討たれぬ。一萬もやがて失はれけり。これは實朝と義時と一つ心にてたばかりけるなるべし。

さて今は偏に、實朝、故大將の跡をうけつぎて、つかさ位滯ることなく、よろづ心のまゝなり。建保元年二月二十二日正二位せしは、閑院の内裏造れる賞とぞ聞き侍りし。同じき六年權大納言になりて、左大將を兼ねたり。左馬のつかさをぞつけられける。その年やがて内大臣になりても、猶大將もとのまゝなり。父にもやゝ立ち勝りていみじかりき。この大臣は、大方心ばへうるはしく、猛くも優しくもよろづ難なかりければ、ことわりにも過ぎて、武士の靡き從ふさま、父にも超えたり。いかなる時にかありけむ、

修善寺　伊豆國（靜岡縣）田方郡修善寺町。

建保元年　（一八七三）

閑院の内裏　京都市上京區二條の南、洞院の西。

左馬のつかさ　左馬寮の御監。御監は、頭（カミ）の上の官。





山はさけ海はあせなむ世なりとも
きみにふたごころわがあらめやも

とぞ詠みける。

時政は建保三年にかくれに

しかば、義時ぞあとを繼ぎける。故左衛門督の子にて、公曉といふ僧あり。親の討たれにしことを、いかでかやすき心あらむ、いかならむ時にかとのみ思ひわたるに、この内大臣また右大臣にあがりて、大饗など珍らしく東にて行ふ。京より、尊者を始め、上達部・殿上人多くとぶらひいましけり。さて鎌倉に移し奉

挿繪　實朝の木像。

尊者　大饗の時に招く首席の客。

鎌倉に移し奉れる八幡。今

れる八幡の御社にまうづる、いと嚴めしき騒ぎなれば、國々の武士はさらにもいはず、都の人々も扈從しけり。たち騒ぎのゝしる者、見る人も多かるなかに、かの公曉打ち紛れて、女のまねをして白き薄衣ひきをり、大臣の車よりおるゝ程をさしのぞくやうにぞ見えける。あやまたず首を打ち落しぬ。その程のとよみ、いみじさ思ひやりぬべし。かくいふは承久元年正月二十七日なり。あまたつどひ集れるものども、たゞあきれたるより外のことなし。京にもきこし召しおどろく。世の中、火を消ちたるさまなり。扈從に西園寺の宰相中將實氏も下り給ひき。さならぬ人々も、泣く泣く袖をしぼりてぞ上りける。

—（增鏡）—

の鎌倉鶴ケ岡八幡宮。本社はもと山城の石清水八幡なり。

承久元年（一八七九）

**增鏡**　十卷。作者不詳。後鳥羽天皇の御誕生より後醍醐天皇に至る約百五十年間の史實を記せり。體裁は大鏡に倣ひて、嵯峨の清涼寺に於て百餘歳の尼が物語りし所を記錄せる態となせり。





## 九　箱根路

正岡子規

箱根路にかゝれば、なんとなく行脚の心の中嬉しく、秋の短き日は全く暮れながら、谷川の音耳を洗うて、煙霧模糊の間に白雲光あり。

湯元に辿り着けば、一人のをのこ袖を控へて、「よき宿まゐらせん」といふ。引かるゝまゝに行けば、むさくろしき家なり。前日來の病も未だ全くは癒えぬに、この旅館に一夜の寒氣を受けんこと氣遣はしく、やゝ落膽したるが、これこそ風流の本意、行脚の眞面目なれと、そのまゝこゝに宿りぬ。

次の日まだき起きいでつ。板屋根の上の滴るばかりに霑ひたるは、昨夜の雲のやどりにやあらん。夜もすがら雨と聞きしは、筧の音、谷川の響なりしものをと、はや山深き心地ぞ

**正岡子規**　名は常規。松山の人。俳人。明治三十五年歿、年三十六。

模糊　明白ならぬさま。ぼんやりとした。

湯元　箱根七湯の一。

すなる。

今日は一天晴渡りて、瀧の水朝日に閃くに、鶺鴒の小岩傳ひに飛び歩くは、逃ぐるにやあらん、此方へとしるべするにやあらんと、草鞋の運びおのづから輕らかに、箱根街道登り行けば、鶯の聲左右にかしまし。

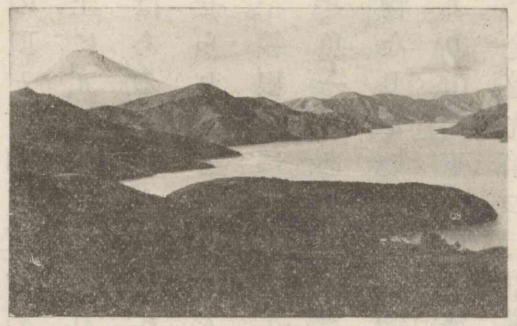
病み疲れたる身の、一足登りては一息ほつとつき、一坂登りては巖端に休む。駕籠舁の頻りに駕籠を勸むるを耳にもかけず行けば、はや二子山鼻先に近し。谷に臨める形ばかりの茶屋に腰掛けて打見やれば、千仞の谷間より木を負うて登り來る樵夫二人、ものも得いはで汗を滴らすさまいとあはれなり。樵夫も馬子も皆足をこの茶屋に休むれば、それぞれにいたはる老婆のなさけ、一碗の澁茶よりもなほ濃し。「名物ありや。」と問へば「力餅といふものなり。」とて、おほきなる餅の燒きたるを二つ三つ盛り來る。力餅の力を藉りて登ること一里あまり、杉・樅の大木道を挾み、元箱根の一村、目の下に見えて、秋さびたるけしき、仙境に入りたるが如し。

二子山　箱根中央火山の東南端。

挿繪　箱根蘆の湖。







幾重の嶺を攀ぢ、幾片の白雲を踏みて、登り着きたる山の頂に、鏡を磨ぎ出せる蘆の湖を見初めし時の心廣さよ。あまりの絶景に、恍惚として立ちもえ去らず、木の株に坐してつ

元箱根　蘆の湖々畔の村。

蘆の湖　箱根山頂の湖、周圍約十九粁（挿繪參照）

く〳〵と見れば、山更に靜かにして、風吹かねども冷氣冬の如く足もとより登りて、身にしみ渡る心地せり。波の上に飛びかふ鵠鴿、忽ち來り忽ち去る。秋風に吹惱まされて力なく、水にすれつあがりつ胡蝶のひら〳〵と舞ひ出でたる、箱根の頂とも知らでやあらん。遙かの空に、白雲とのみ見つるが上に、兀然として現れ出でたる富士、こゝよりもなほ二千仞はあるべしと思ふに、更にその影を深く沈めて、漣に縮め寄せられたる樣いはんかたなし。

箱根驛にて午餉したゝむるに、皿の上に尺にも近かるべき魚一尾あり。主人誇りかに、「こは湖水の產にしてこゝの名物なり」といふ。名を問へば、「赤腹」と答ふ。面白き魚の名なり。是より山を下るに、見渡す限り白薄なり。

金紋先箱の行列堂々として、鳥毛・片鎌など威勢よく振立

箱根驛　蘆の湖々畔にある村で、その東端を關所の址とする。

赤腹　淡水產。形は鮎に似て腹が赤い。





でて練り行きし街道の繁昌振も、あはれ物の本にのみ殘りて、草刈る童の行き通ふ小道一筋を除きての外は、草の生ひ出でぬ處もなく、僅かに行列の俤を薄の穗に留めたり。

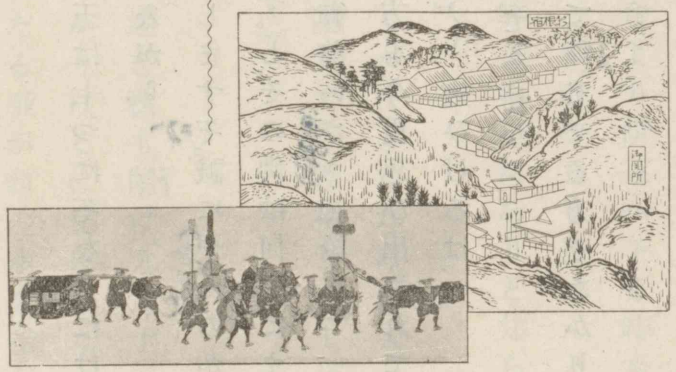
槍立てて通る人なし花薄

—（旅の旅の旅）—

箱根路の石落ちかゝる薄かな

裾山や小松の中のをみなへし

（正岡子規）



挿繪　古の箱根の關と參勤交替の大名行列。

# 一〇 空行く雁

新玉の年立返りて、一萬は九つ、箱王は七つにぞなりにける。或夕暮、箱王は母の膝の上に戯れながら、

「如何に母御前、父はいづくにおはしますぞ。誠にや人のかたるは、『父御前は佛になりてまします。』と、その佛は何國にましますぞや。往きて拜み奉らばや、母御前いざさせ給へ。」

といひければ、遙かに忘れたる來し方も今更思ひ出されて、消え入るばかりに思はれて、母泣く〳〵宣ひけるは、

「あの曾我殿こそおのれらが父にてあれ。」

と心強く語らひけれども、涙に咽びて陳じやる方ぞなかりける。箱王かさねて申しけるは、

「父御前は、まことやらん『狩場より歸り給ふ道にて、工藤一

一萬　曾我十郎祐成の幼名。その實父河津祐泰は、伊豆國田方郡河津の莊を領せしが、伊豆赤澤山の遊獵に際し、工藤祐經のために射殺せらる。一萬時に年五歳。母、曾我祐信に再嫁せり。

箱王　一萬の弟。五郎時致の幼名。

曾我殿　太郎祐信。祐成兄弟の養父。

一藤　檢非違使廳の尉の第一座をいふ。工藤祐經その位にあり。





藤とやらんに射られて死に給ひぬ。』と、兄御前は語らせ給ふぞや。當時鎌倉殿のきりものにて、鎌倉より伊豆へ下る時もあり、伊豆より鎌倉へ上る時もありとや。我等をも殺さんとも思ふらん。我等この里にありと知らでや過ぐらん。」

など、おとなしくかたりければ、母よりはじめて、女房達までみな袖をぞしぼりける。

かくて夏も過ぎ、秋も闌け、九月十三夜の月隈もなかりけるに、兄弟ふたり庭に出でて遊びゐたるに、五つ連れたる雁がねの南を指して、飛びけるを見て、一萬申しけるは、

鎌倉殿　源頼朝。

この里　相模國足柄下郡曾我中村。

挿繪　古本曾我物語袖繪。

「あれ見給へ、箱王殿。空を飛ぶつばさも、皆別のつばさを交へざりけり。五つ連れたる鳥の中に、一つは父、一つは母、殘りの三つは子どもにてぞあるらん。物言はぬ鳥類すら斯くの如し。我等は人倫に生れながら、和殿は弟、我は兄、母はまことの母なれども、曾我殿はまことの父にてましまさぬこそ悲しけれ。我等が父をば河津殿と申してありきとかや。父だにも世におはしまさば、馬・鞍をも賜はり、弓矢をも持ちて、今ぞ思ふやうに物を射ありきなん。我々より幼き者にても、馬・鞍・弓矢をもて物を射ありくことの羨ましさよ。これらのことども思ひつゞくれば、いつよりも今宵は父御前の戀しくおはしますぞや。」

とて、袖に顔をさし入れてさめ〴〵と泣きければ、弟もこざかしく顔をあはせて泣きゐたり。一萬の乳母の女房これを



聞きて、

「あなあさまし、人もこそ聞け。いかに和上萬達、夜も更けぬるに、などさやうにてはおはするぞ。とく〳〵入らせ給へ。」と怖ろしげにいひければ、二人のものは門外に逃出でて、思ふやうに飽くまで泣きて後、内に入りにけり。

その後は、二人の者ども我が身の程を知りぬれば、世に亡き父を慕ひつゝ、語り合はするまではなけれども、たゞ目ばかりを見合はせて、互に袖をぞ濡しける。未だ十歳にも滿たざるに、あはれは深く思ひ知りけり。

或時兄弟は竹の小弓に薄矧（すゝきはぎ）の小矢を取添へて、遠侍に出でて遊びけるが、明障子のありけるに、二人立向ひ、あなたこなたへ射通して、一萬、箱王に申しけるは、

「我等もいつか成長して、和殿は十三、我は十五にだにもな

薄矧　薄を折りて矢としたるもの。矧は矢を作ること。

るならば、如何ならん野山にてもあれ、親の敵祐經をかくの如くさし合ひて射取りて、とにもかくにもなりなん。和殿も弓よく射習ひ給へ。我も射習はん。弓矢は男の一の能にあるなるぞ。」

といひければ、弟もうなづきて領承しけり。年ばへには怖ろしきことかなと人々思ひける間、或人一萬が乳母に此の由を語りけり。

―（曾我物語）―

**曾我物語**　十二卷。曾我兄弟の父の仇討せしことを主とせる小說。作者不詳。





## 一一　辨慶の太刀取

辨慶思ひけるは、「人の重寶は千そろへて持つぞ。奥州の秀衡は名馬千疋・鎧千領、松浦の大夫は胡籙千腰・弓千張。かやうに重寶を揃へて持つに、いで我は夜に入つて京中に佇みて、人の佩きたる太刀千振取つて我が重寶にせん。」と思ひ、夜な夜な人の太刀を奪ひ取る。しばしこそありけれ、當時「洛中に長一丈ばかりある天狗法師のありきて、人の太刀を取る。」とぞ申しける。

かくて今年も暮れ、次の年の五月の末六月の初までに、九百九十九腰こそ取つたりけれ。六月十七日五條の天神に參りて夜と共に祈念申しけるは、「今夜の御利生に、よからん太刀を與へてたび給へ。」と祈誓し、夜も更けぬれば天神の御前

**辨慶**　幼名鬼若丸。比叡山の西塔に住して武藏坊と稱す。文治元年（一八四五）、奥州の衣川にて義經に從ひ戰死す。

**秀衡**　藤原秀衡。義經を助けし人。文治三年（一八四七）歿す。

**松浦大夫**　松浦判官源大夫久。渡邊綱の曾孫。

を出で、南へ向ひて行く行く人の家の築土の際に佇みて、天神へ參る人の中に、良き太刀持ちたる人をぞ待ち居たる。

曉方になりて堀河を下りに行きければ、面白き笛の音こそ聞えけれ。辨慶之を聞きて「面白や、さ夜ふけて天神へ參る人の吹く笛は、法師やらん、男やらん。よからん太刀を持ちたらば取らん。」と思ひて、笛の音の近づきければ、さしくゞみて見れば、未だ若き人の、白き直垂に、胸板を白くしたる腹卷に、金作りの太刀の心も及ばぬを佩かれたり。辨慶之を見て、あはれ、太刀や、何ともあれ、取らんずるものをと思ひて待つ處に、御曹司は、木の下に、けしからぬ法師の太刀わきばさみて立ちたるを見給ひて、彼奴は只者ならず、此の比都に人の太刀を奪ひ取る者はきやつにてあるよと思はれて、少しもひるまずかゝり給ふ。辨慶現れ出でて申しけるは、「只今靜まり

御曹司　源九郎義經。幼名牛若丸。





て敵を待つ處に、けしからぬ人の物の具して通り給ふこそ怪しく存じ候へ。左右なくてこそ通すまじけれ。然らずば其の太刀こなたへ給ひて通られ候へ。」と申しければ、御曹司之を聞き給ひて、「此の程さるをこの者ありとは聞き及びたり。左右なく得こそ取らすまじけれ。ほしくばよりて取れ。」とぞ仰せられける。

「さては見參に參らん。」とて、太刀を拔いて飛んでかゝる。御曹司も小太刀を拔いて、築土のもとに走り寄り給ふ。武藏坊之を見て、「鬼神ともいへ、當時我を相手にすべき者こそ覺えね。」とて、もつて開いて丁と打つ。御曹司、こはけなげ者かなとて、電の如くに弓手の脇へつと入り給へば、うち開く太刀にて、築土の腹に切先打ち立て、拔かんとしける隙に、御曹司走り寄りて、ゆん手の足を差し出して、辨慶が胸をしたゝかに

踏み給へば、持ちたる太刀をからりと捨てたるを取つてえいやといふ聲のうちに、九尺許ありける築土にゆらりと飛び上り給ふ。辨慶、胸いたく踏まれぬ、鬼神に太刀とられたる心地して、呆れてぞ立つたりける。

御曹司、「是より後はかゝる狼藉すな。さるをこの者ありとかねて聞きつるぞ。太刀も取りて行かんと思へども、欲しさに取りたりと思はんずる程に、とらするぞ。」とて、築土のおほひに押しあてて、踏みゆがめてぞ投げかけ給ふ。辨慶太刀取つて押し直し、御曹司の方をつらげに見やりて、「念なく御邊はせられて候ものかな。常に此の邊におはする人と見るぞ。今宵こそ仕損ずとも、是より後に於ては心ゆるすまじき物を。」と、呟き呟きぞ行きける。

—（義經記）—

義經記　八卷。義經の一代記。作者不詳。





# 一二　仁和寺の法師

吉田兼好

一　石清水まうで

仁和寺にある法師、年よるまで石清水を拜まざりければ、心うく覺えて、ある時思ひ立ちてたゞひとりかちよりまうでけり。極樂寺・高良などを拜みて、かばかりと心得てかへりにけり。さて、かたへの人に逢ひて、「年ごろ思ひつることはたし侍りぬ。聞きしにも過ぎて尊くこそおはしけれ。そも參りたる人ごとに山へ登りしは、何事かありけん。ゆかしかりしかど、神へ參るこそ本意なれと思ひて山までは見ず。」とぞいひける。少しのことにも先達はあらまほしきことなり。

二、鼎かづき

これも仁和寺の法師、童の法師にならんとする名殘とて、

**吉田兼好**　本姓は卜部氏。汎く神・儒・佛の學に通じ、又和歌をよくす。正平五年（一三一〇）歿、年六十九。

仁和寺　京都市右京區花園にあり。光孝天皇の勅願寺。眞言宗の總本山。

石清水八幡　官幣大社。京都府綴喜郡八幡町にあり。

極樂寺・高良　共に男山の麓にありて、八幡宮の末社。

おの〳〵あそぶことありけるに、醉ひて興に入るあまり、傍なる足鼎を取りて頭にかづきたれば、つまるやうにするを、鼻を押し平めて顏をさし入れて舞ひいでたるに、滿座興に入ること限りなし。暫し奏でて後、拔かんとするに大方拔かれず。酒宴ことさめて、「いかゞはせん。」と惑ひけり。とかくすれば、首のまはり缺けて血垂り、たゞ腫れに腫れて、息もつまりければ、打ち割らんとすれど、たやすく割れず、響きて堪へがたかりければ、かなはで、すべきやうなくて、三足なる角の上に帷子を打ち掛けて、手を引き杖を突かせて、京なるくすしがりゐて行きけり。道すがら人の怪しみ見ること限りなし。くすしの許に差入りて向ひゐたりけん有樣、さこそは異樣なりけめ。物をいふもくゞもり聲に響きて聞えず。かゝることは書にも見えず、傳へたる敎もなし。」といへば、また仁和寺

にかへりて、親しきもの、老いたる母など、枕がみに寄りゐて泣き悲しめども聞くらんとも覺えず。かゝるほどに或者のいふやう、「たとひ耳・鼻こそ切れうすとも、命ばかりはなどか生きざらん。たゞ力を立てて引きたまへ。」とて、藁のしべをまはりにさし入れてかねを隔てて、首もちぎるゝばかり引きたるに、耳・鼻缺けうげながら拔けにけり。からき命まうけて、ひさしく病みゐたりけり。

—（徒然草）—

挿繪　鼎かづき。

徒然草　上下二卷。兼好法師の隨筆を輯む。評論は社會萬般に亙り、論斷の基點は佛敎を中心とせり。論理の高尙なる事我が國文學書中稀に見るところなり。

# 一三　長柄堤の訣別

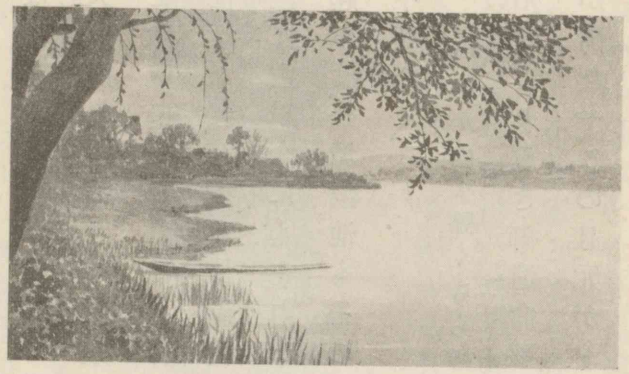
坪内逍遙

（豫備說話）豐臣秀吉薨去の後、秀頼を中心として、大阪方は、内は正邪の兩派に分れて徒に抗爭を重ね、外は關東の壓迫日を追うて甚しく、收拾すべからざる實狀にあり。時に正義の士片桐市正且元、身を以てこの難局に處し、主家の安泰を計りしも、事志と違ひ、遂に反對黨のために陷れられて、居城茨木に歸らんとす。

晨鷄再び鳴いて殘月薄く、征馬連りに嘶いて行人出づ。はや分れゆく横雲や、殘んの星を一つづつ、鐘が消しゆくいなのめの、長柄堤に秋たけて、一むら蘆に風黑く、ありあけすごき大川水、ゆきて歸らぬ浪の音、狹霧にむせび白けゆく、千草が蔭の蟲の聲、哀れはいとゞまさるらん。片桐市正且元は、居城茨木へ立ち退かんと、從ふ郎黨一百餘人、丑の刻に邸を立つて、大阪城をあとになし列を正してしづ〳〵と長柄堤にさしかゝる。

（中略）

後には何か一思案、寂然として駒たつる、長柄堤のありあけがた、塒に囀る小鳥の聲、川霧やう〳〵晴れゆけば、遠樹模糊として幹を分ち、ほの見えわたる賤が屋に、一筋のぼる朝烟、くたかけの聲勇ましく、生氣溢るる東の、空には似ぬや入るかたの、月すさまじき柳蔭、枯葉枝まばらにして風飄々、見る目も昏し遠方に、おぼろおぼろとあらはるゝ、名におほ阪の四衢、八街、悄然として寂しげに、一棟高く聳えしは、



市「おゝ、あれこそはお天守ぢやなあ。南山不落と祝はせられ、千萬年の後までもと築かせられし大阪城、故殿下かくれ

**坪内逍遙**　名は雄藏、岐阜縣の人。英文學者。小說家、文學博士。早稻田大學名譽教授。昭和十年歿年七十七。

**時**—慶長十九年（一二七四）の晩秋。

**處**—長柄堤。今、大阪市東淀川區豐崎町の附近。

**人**—片桐市正且元。木村長門守重成。

いなのめの　「明く」に係る枕詞。こゝでは、直ちに「夜明け方」の意とする。

片桐市正且元　秀吉の臣。直貞の子。少時から秀吉に從うて戰功あつた。後秀頼の傅となる。元和元年（一二七五）、大阪夏の陣の時、東西和解に盡力したが成らず、秀頼の最期を聞いて自刃す。年六十。

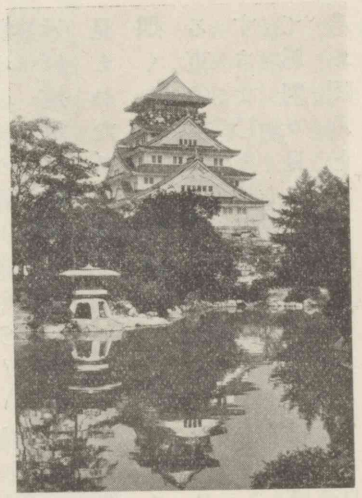
茨木　攝津國（大阪府）三島郡茨木町。

くたかけ　鷄の古名。

挿繪　長柄堤。

南山不落　南山（支那の名山）の永遠に崩壞せぬ如く堅固で落城することがない、の意。

させ給ひて後、まだ程もなきに礎ゆらぎ、諸大名の心は離れ離れ、取分け加藤肥州逝去の後は、思慮ある者には堅節なく、義勇を存ずる者才略乏しく、阿附同黨して相鬩げば、大政所の御方さへ當家を餘處に見そなはし、浮世はなれし御有樣。脣齒已に亡ぶ。今にもあれ事起らば、金城湯池もその甲斐なく、」



いひかけて聲くもらせ、

市「須彌より重き御遺命、夢いさゝかも忘れざれど、御運の末か情なや。この且元がすること爲すこと、いすかの嘴とくひちがひ、兩家を繫ぐ絆にもと、迎へ奉りし千姫君は、東西

故殿下　豐臣秀吉をいふ。「殿下」の稱は、昔は攝政・關白にも用ゐた。

加藤肥州　加藤肥後守清正　慶長十六年（一二一七）歿、年五十。

大政所　攝政・關白の母。こゝでは秀吉の妻をいふ。秀吉の薨後、出家して高臺院湖月尼と稱した。

脣齒已に亡ぶ　左傳、僖公五年に「脣亡ビテ齒寒シ」。賴む處を失つたをいふ。

挿繪　大阪城天守閣。

須彌　梵語の音譯。佛教にいふ須彌山。大海中にある。高さ八萬由旬（一由旬は六町一里として三十里）といふ。

千姫　德川秀忠の女。慶長八年秀賴に嫁す。





不和の導火となり、毘盧舍那佛の御胸にも、大慈大悲は宿らざるか。お家とこしなへに康かれと、祝ひし文字が元となり、降つて沸いたる難題は、只前門の虎にして、後へに不慮の豺狼ありか。かゝる仕儀となつたること、御運の末とは

いひながら、」

こらへず馬より跳び下り、かなたに向ひ平伏なし、

市「これしかしながら不肖且元、愚昧にして先見無く、姑息因循して大事を誤り、空しく關東の罠にかゝり、仰せつけられし御遺命に背き奉るけふの仕合せ、不忠とも言ふ甲斐なしとも思召さん。それを思へば、某がこの腸はちぎるゝばかり。償ひがたき不臣の罪は、あの世で御わび

毘盧舍那佛　京都方廣寺の大佛。慶長十五年秀賴再建す。

難題　京都方廣寺大佛殿の鐘の銘に「國家安康」の文字があり。家康がこれによつて難題を出したを言ふ。

挿繪　國家安康の拓影。

仕らん。お許しなされて下さりませ。」

在すが如く兩手をつき、人目なければ稍しばし、不覺の涙に暮れけるが、やゝあつて心附き、

市「あゝ我ながら不覺の至り。わが大罪の御わびよりも、さしかゝるお家の安危。長門守には如何にせし。心元なきことどもぢやなあ。」

すかし眺むる折こそあれ、遙に聞ゆる蹄の音、ほどもあらせず只一騎、殘霧つんざき一散に、汗馬に宙を走り來る、木村長門守重成。

木「市正殿に候な。」

市「長門殿、待ちかねしぞ。」

いふ間に駈け寄る轡づら、右手におりたち顏見合はせ、言葉はなくてそゞろにも、まづ袖ぬるゝ朝露や、風飄々たる枯柳の枝、

長門守　木村重成。重茲の子。秀頼に仕へ、精忠無比。冬の陣に、進んで佐竹氏の軍を破り、和議なるに及んで、使として家康の陣營に到り、從容として使命を果した。夏の陣に、先陣となつて井伊直孝の軍を衝き、奮戰して死す。年二十一。





入りかたの月ゆらめきて、老いゆく秋の寂しさを、長柄堤に停むらん。

木「もはや豐臣の御社稷も、いよ〳〵末となつたるか。棟梁と頼む足下まで、佞人・讒者の毒舌に、逆臣の汚名を受け、空しく退身せらるゝとは。それがし圖らぬ事よりして、端なくも御母公の御嫌疑蒙り、出仕を遠慮の其の間に、思ひがけぬ珍變あり。續いて足下に御討手と、昨朝承り大いに驚き、すぐにお表へ參入すれば、城内議論沸くが如く、織田入道殿日ごろに似氣なく、激論の末、席を蹴立て、只今退座ありしとばかり。後は亂脈無法の評定。御母公の威を笠に被る大野・渡邊等が我意暴慢。この上は是非に及ばず、彼等を一刀に斬つて捨て、腹かつ切らんと、二度まで刀の柄に手は掛けしが、貴殿が日ごろの教訓を、思ひ出して無念を忍び、

佞＝侯

御母公　秀頼の生母淀君。

織田入道　織田信雄常眞入道。信長の次子。秀吉に從ふ。

大野　大野修理亮治長。

渡邊　渡邊内藏介糺。

寃と知つて忠臣を、救ひ得ざりしいふ甲斐なさ。」

悔むを且元おし宥め、

市「いしくも堪忍せられしぞや。かねても屢申せし如く、お家の大仇は彼等にあらず。鼠輩のために命を落すは、大忠臣の所爲にあらじ。某とても此の度の一條、遺恨骨髄に徹すと雖も、今更繰返すは愚癡の至り。大切なるはお家の後事。それがし退去のこと關東に聞えなば、破綻生ぜん事治定なるに、きのふまで

挿繪　長柄堤の訣別。（劇）

癡＝痴





は去就を定めざりし織田殿、已に心を變じ、京表へ退身せられしからは、城内の祕密悉く漏れ、年來の苦心皆うたかた。大亂破裂せんは目前なり。この上は只ひとへに籠城の計畫こそ肝要なれ。」

木「して、籠城の計畫とは、何を以て先とすべきか。」

市「されば、今御城に兵糧・金銀は乏しからず。まつた、猛卒・勇士にも事かゝねど、得難きは智謀の將なり。それがしこれを慮り、萬一の備へをなし置きたり。」

木「して、その智謀の將とは。」

市「今、九度山に隱れ忍ぶ、信州上田、前の城主、眞田安房守が二男佐衞門佐幸村こそ、故太閤の恩を思ふ智勇兼備の良軍師。關が原の一戰以來、關東の跋扈を怒り、蟄して世の樣を窺へるを、先年お身方となし置いたり。事起らば、上使を以

祕＝秘

九度山　紀伊國（和歌山縣）伊都郡高野山の北谷。

眞田安房守　名は昌幸。秀吉に從ふ。關が原の役に大阪方として功あり、役後、九度山に放たる。慶長十三年（一二六八）歿、年六十五。

幸村　昌幸の第二子。父と共に九度山に隱れ、秀頼の召に應じて大阪に赴き奇計を以て屢〻東軍を破る。夏の陣に奮戰し、遂に戰死す。年四十六。

て急ぎ彼を招かるべし。合戰の進退は一切彼の人に任せられよ。その他關が原の一亂以來、浪々なせし長曾我部盛親、まつた、黑田家の浪人後藤又兵衞基次、いづれも得易からぬ良將なるが、かねてちなみはつけ置きたり。上御使を以て招かせられなば、心を傾け馳せ參ぜん。これ第一の手配りなり。」

木「して又、籠城となつたる曉、敵を防がん手配りは。」

市「その儀もかねて地利を考へ、出丸なくてはかなふまじと、前年紀州の山々より、材木あまた伐り出させ、商業のためと僞り、紀州川の川上より、浪速津に押し流させ、御船入に積みおいたり。まつた、港口の御庫には、年ごろ努めて購ひおきたる數萬俵の糧米あり。籠城數年に亙るといふとも、なほ支ふるに餘あるべし。」

長曾我部盛親　元親の第四子。土佐の領主。關が原役に大阪方に加り、敗れて封を失ふに及び、京都に隱る。元和元年（一二七五）歿。

黑田家　筑前博多の城主黑田長政。

後藤又兵衞　基國の子。長政に仕へて屢〻戰功があり、後長政の秀頼に好からざるを知り、仕を辭し浪人となりしも、秀頼に招かれて大阪に入り、夏の陣に奮戰して死す。

紀州川　紀の川。奈良縣南部の山中に發し、西流して、和歌山市の西北にて海に入る。





木「それに加へて、故殿下が貯へおかれし數萬の金銀、近年御出費嵩むと雖も、なほ若干の餘財あり。」

市「甲冑兵具も乏しからず。」

木「城は名に負ふ南山不落。」

市「眞田・後藤の智勇をもつて、此の堅城にたて籠り、忠臣悉く心を一にし、ひとへに君家を守護するときんば、」

木「たとへ關東の老奸雄、利をくらはせ、諸大名をなづけ、六十餘州の兵を盡くし、四方八面より攻め寄すとも、」

市「なか〳〵三年・四年がほどには攻め落さんこと難かるべし。」

木「まつた、若年には候へども、いよ〳〵軍はじまりなば、われまた一方を承り、速水・御宿・和久等と共に、忠義を金鐵の堅きに比し、命はもとより鴻毛の、吹き飜さん白旗は、祖先佐

老奸雄　德川家康を指す。

速水　速水守久。
御宿　御宿正倫。
和久　和久宗是。
祖先佐々木　近江守高綱。

佐木が四つ目結、君臣・將士心を一にし、千變萬化の手を盡くさば、金石も亦透りぬべし。利慾に集る關東勢、なに退くるに難かるべきや。此の上は仰せに從ひ、此の事君に言上なし、直ちに軍の手配りせん。御心安かれ、市正殿。」

市「ほゝ、頼もしし頼もしし。唯大切は上下の一致。必ず忠勤勵まれよ。とはいひながら、往時に照らし、成り行く末を鑑みれば、」

木「淀の御方の御氣質、社鼠にひとしき大野・渡邊。」

市「上、御發明にわたらせらるれど、」

木「讒佞これを蔽ふがゆゑ、」

市「地の利はあれども、人の和なく、」

木「故太閤が御威武に、をのゝき震ひ打ち伏しし、六十餘州の民草も、」

四つ目結





市「天の時にや大御所の、おのづからなる德風に、いつしか靡く世の有樣。」

木「如何なればかくまでに、御運傾く西天の、」

市「有明の影うすれつゝ、」

木「東天紅と八面に、かしましく鳴くくたかけは、」

市「新日、東天に昇るといふ、」

木「世の成行の、」

二人「影なるか。」

是非もなき世の有樣と、入るかたの月眺め入り、しばしは愚癡にをちかた寺、耳驚かす鐘の聲、夜はほの〴〵と明けにけり。

（中略）

「さらば〳〵。」と西東、見送る方に霧や立つ、まなこや曇るおぼろおぼろ。いななく駒の聲はして、立ちわかれゆく兩人が、この世に殘す面影は、また見ぬ形とぞなりにける。

—（桐一葉）—

大御所　德川家康。

# 一四 京の雨

荻原井泉水

雨の美しさ。――雨の趣。それを私は京都に來てからほんたうに味はひ得たやうに思ふ。

春の雨の降るといふよりも、靜かに濡らす、地上を潤ほすといふ感じも好い。風が少ない所なので雨はしと〳〵としづくするやうに落ちる。賀茂川べりの柳、長い橋、古風な家構などが、皆雨を得て繪畫的に生きる。夏の雨の、うちそゝぎ、烟らし、地の底まで浸すといふ感じも好い。若葉の綠もその雨を得て愈濃くなる。青い繪の具が流れさうにも見える。竹林からはその雨に依つて筍がぐん〳〵と伸びる。墨の垂れるやうな雨空に道が薄白くなつて、竹林のにじんだやうな綠の前を、おつとりとした牛が、濡れて牽かれてくる。全く紙本

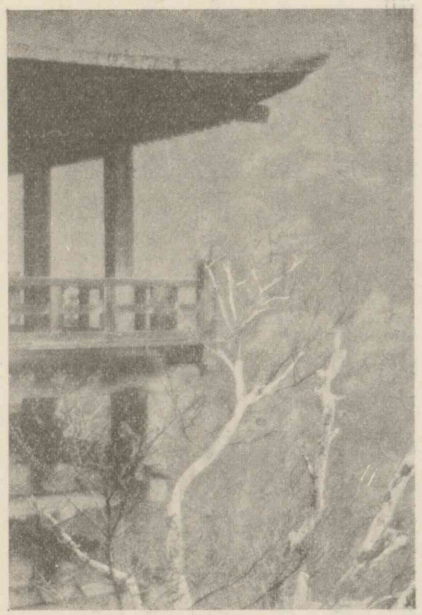
**荻原井泉水** 名は藤吉。明治十七年、東京市に生る。俳文俳句研究家。





水墨の境地である。

秋の終から冬の初に降る時雨の味はまたおもしろい。古人は時雨をほろ〳〵と降るといつてゐるが、それは全くほろほろと輕いものが、零れ落ちるやうな感じなのである。殊に竹の葉に觸れると輕く鳴るその音を聞いて、おゝ時雨が來たのか、と耳を立てるほどもなく止んで、暫くたつと、再びほろ〳〵とその音がする。庭の面を見ると、石がしつとりと、濡らされてゐて、そこに又薄い日がさしてゐる。昔の俳人は非常にこの雨を愛でたもので、



挿繪　春雨煙ぶる清水。

芭蕉一門の選集として、京都から上梓した猿蓑集には、その巻頭に時雨の句が並べてあり、京都に住んでゐた蕪村にも、時雨の句は特に多い。

鶯の竹に來そめてしぐれけり　蕪村

夏の鶯を老鶯といひ、冬の鶯を笹子といふと歳時記にはあるが、實際は冬の初に、やはり老いた鶯が鳴くものだといふことも迂濶ながらこの頃私は知つたのである。

あれ聞けとしぐれ來る夜の鐘の聲　其角

京都は寺が多いだけあつて、鐘の聲も到る所で聞かれる。知恩院の鐘、清水寺の鐘、大佛の鐘、東福寺の鐘、それ〴〵にその音色が違ふのである。

地文學者の話に依ると、時雨といふものは、小さく凝集した雨雲がほつと解けて、消えたり又できたりする時々に起

京都から上梓した云々　元祿四年（一三五一）のこと。

猿蓑集、六卷。芭蕉七部集の一。

蕪村　谷口氏。後に與謝氏。大阪の俳人。天明調の代表者。天明三年（一四四三）歿、年六十八。

歳時記　俳諧歳時記。四卷。瀧澤馬琴の著。

其角　榎本氏。芭蕉門下の十哲の一。寶永四年（一三六七）歿、年四十七。

知恩院　華頂山大谷寺。淨土宗鎭西派の總本山。京都市下京區林町にあり。

大佛　方廣寺のこと。天台宗。京都市下京區大和大路にあり。

清水寺　下京區清水町音羽山の中腹にある法相宗の





る現象なので氣流の關係から或一局所に起るが、それは四周に山があつて盆地をなし、水蒸氣の多い、且つ冷え易い所に限るといふことである。その點で京都は十分時雨の名所とするに足りる。ほんたうの時雨の味は、京都のやうな所でなければわからぬといつてもよい。東京やその他の平野なり海なりに近い所で、冬の初に降る雨を漫然と時雨などといふのは、歳時記の模倣に過ぎないだらうと思ふ。

化けさうな傘貸す寺のしぐれかな　（蕪村）

鷺濡れて鶴に日のさすしぐれかな　（同）

しぐるゝや宮にはげたる鬼女の面　（闌更）

名刹。

東福寺　臨濟宗東福寺派の大本山。京都五山の一。下京區本町にあり。

闌更　高桑氏。加賀の俳人。寛政十一年（一四五九）歿、年七十三。

## 一五 新月

北原白秋

斷崖の松の木に
月ほそくかゝりたり、
ほそき月、
金無垢の月。
入海の波間にも
また、月はしづきゆく
沈々と
金の鈎。

**北原白秋** 名は隆吉。明治十八年福岡縣に生る。詩人。

しづく 水の中に透きとほつて映る。





金無垢のするどさよ、
絹漉の雨ののち、
しんじつに
走りいづるその蒼さ。
島黑く、海黑き
眞の闇、
舟ひとつ進みゆく、
その上に細き月。
なにかわかね、
魚族は目をさまし、

山水畫卷（雪舟筆）



鈴蟲は一心に鳴きしきる、
虔（つゝしみ）の極（きはま）り。

闇の夜は斷崖、
かげゆかず、ゆく舟も見えわかず、
たゞ光る細き月、
金無垢のほそき月。

—（白秋詩歌選）—

## 一六　美術の鑑賞

川路柳虹

すべて美術といふものは、何に限らず、味はふことによつて價値が出てくるものです。どんな作品にせよ、美術家が精神を籠めて作つたものである以上、これを觀る人は、その苦心の跡を考へることが必要です。作品が決して偶然に出來るものでない以上、その作品はどういふ風にして出來たかを考へ、そして、それを觀て自分はどう感じたかといふことを思つて見るのが、美術を味はふことです。この「味はふ」ことを鑑賞と申します。

畢竟、繪でも、彫刻でも、これを作つた人は、自然について感じたことをそれに表はしたのですから、その表はしたものは、卽ち作者自身の考や、ものの見方の態度を示したもので

**川路柳虹**　名は誠。明治二十一年東京市に生る。詩人。美術評論家。

あると言へます。

それ故、一つの美術品を味はふことは、單に作品を味はふことではなく、その作品を作つた作家の精神を味はふことになります。同じ林檎の繪でも、甲の人のかいたものと、乙の人のかいたものとでは、色も形もすべて相違してゐます。それはなぜかといふに、作者がそれ〴〵自分自身の個性によつて、同じ色でも、甲はこれを強く表はし、乙は非常に弱い調子で表はすといふ風に、その作者の心持や感じが異なるからです。その異なる所に個性の差が生ずるのであり、美術上の作品は、各作者の異なる個性を表はすから面白いのです。

美術家は一般に、人がなんらの注意も拂はない所に非常に注意を拂ひ、人の氣付かない所に美を發見します。一般の人でも、夕日の美しさは漠然ながら知つてゐませう。然し、そ





の夕日が樹の間を洩れる微妙な光だとか影だとかに對して、どれだけ深く注意するかといふことは疑問です。美術家は自然のさういふ微細な點にまでも常に注意してゐますから、そこから人の常に看過してゐるものに對して、非常に美しいものを發見してくるのです。

ですから、繪や彫刻を觀るといふことは、一面には、さういふ自然に對して私たちの看過してゐる美を、美術家によつて教へられるといふことになります。美術品を味はふことは、その味はふことによつて、常にはなんでもなく見えてゐた自然がかうも美しいものであるか、といふことをほんたうに知るところにあります。

私はよく、「私には美術はよくわからない。」とか、「どこが善いのか惡いのか見當がつかない。」とかいふことを聞きます。こ

の「わかる。」といふことは、無論その作品を理解することを意味しますが、然し美術品を理解するには、科學などを理解するやうに、たゞ理窟にだけ依つてはいけません。勿論、理智も必要ではありますが、美術品は理窟によつて解する以外に、「感ずる。」といふことが必要です。だから、美術の鑑賞には、「どういふ風に理解したか。」といふことよりも、「どういふ風に感じたか。」といふことが肝腎です。なんとなれば、美術品はやはり人の感情に訴へるもので、何よりも人を感動させるものですから、これを觀てなん等の感じも起らないといふなら、それは、その作品が美術品としての資格を備へてゐないのか、或はこれを觀る人が感情に乏しいのかに因るのです。こゝに感情といふのは、悲しいとか嬉しいとかいふべきもの、即ち感ずる心のあることをいふのです。感性がなければほん



たうに美術品の鑑賞は出來ません。結局、美術を味はふといふことは、自分の氣持を以てその作品を觀ることをいふのです。

それでは、如何にすればさういふ風に自分の感情で美術品を理解することが出來るかといふに、それにはまづ虚心平氣で作品を觀ること、なん度もなん度もこれを熟視すること、その技巧を知ること、これ等の條件が必要です。

作品を味はふ爲には、徒らに他人の噂や評判などに動かされないで、自分でどれを好むかといふことを考へるべきです。その爲には、まづ作品の前に立ち、邪念を去つて、作品と自分とだけが相對し、それをなん度もなん度も熟視してゐることです。そのうちにいろ〳〵なことがわかつて來ます。

さて、それから一般の技巧即ち作品の技術を見るのです。

巧みであるとか拙いとかいふことは、要するに比較ですから、澤山な作品を觀た上でなければわかりません。澤山な作品を熟視することは、美術の鑑賞上最も必要です。そして、次にはその作品がどういふ風にして出來てゐるかといふ技巧を知ることが必要です。これは多少美術上の知識を養はなければなりませんが、それは急に一時に知るわけにはゆきません。樂譜に關する根本の知識に缺けてゐては、せつかく音樂を聽いてもわからぬやうに、よく美術品を理解するには、やはり一通り技術に關する知識を有する必要があります。油繪と水彩畫との差、繪具の名稱、それから、調子とか色とか筆觸とか樣式とかいふやうなことも、その意味ぐらゐは心得てゐなければなりません。

—（現代藝術講話）—





## 一七　狩野芳崖とフェノロサ

我が國に於ける近代的な美術展覽會の嚆矢ともいふべき第一回繪畫共進會が上野に開かれたのは、明治十五年の九月であつた。飛んで翌々年の四月にその第二回が同じ上野に開かれた。維新以後十幾年、歐化の思潮が全國に瀰漫して、學者・政治家・教育家、誰一人、由緒深い我が國固有の藝術を顧みる者がなかつたのに、いまや國粹保存の機運がやうやく芽ぐみ始めて、とにかく政府主催の下に、國本位の繪畫展覽會が開かれる運びとなつたのである。久しく陋巷に埋もれてゐた畫家達が、奮ひ起つて出品を競つたのも無理はない。

狩野芳崖も此の機運に乘じて奮起した一人であつた。け

狩野芳崖　畫家。長州（山口縣）の人。明治二十一年歿、年六十一。

フェノロサ（1853—1908）明治十一年來朝。東京帝國大學文學部講師となる。東京美術學校の創立者の一人。

れども、彼が心血をそゝいだ作品も、當時の社會からは殆ど顧みられなかつた。第一回目は、唯陳列されたといふだけであつた。第二回目は三等賞を貰つたが、それは入賞中の最下位のものを得たに過ぎなかつた。後者は「花下奔馬の圖」と題して縱四尺、横二尺程の小幅ながら極めて見事な出來で、作者も私かに許した傑作であつたが、しかもそれが社會から得た所のものは、賞讃ではなくして罵倒であつた、喝采ではなくして冷笑であつた。

さすがの芳崖も、内心がつかりして居ると、ある日、不思議な客が彼の陋屋を訪れた。客は碧眼紅毛の西洋人であつた。取次ぎに出た彼の妻は、少しく狼狽した氣味で、あたふたと芳崖の居間へ來た。

「妙な人が訪ねてまゐりましたよ。あなた、西洋人が……。」



「西洋人。」芳崖も怪しんだ。

「一人でか。」

「いゝえ、通辯が隨いて來まして、先生の今度展覽會へお出しになつた御作を拜見して、大變感心しましたので、急にお目に懸かりたくなつて伺ひましたと、かう申します。」

芳崖の眉はぴりりと動いた。

「西洋人の癖に生意氣な口を利きをる。不在と言つて追つ拂つてしまへ。」

「でも、居りますと言つてしまひました。」

「ぢや、仕方ない。氣分が惡くて臥せつてをるとでも言つておけ。會ふのは厭だ。」

夫の氣象を知つてゐる妻は、爭つても無駄だと思つたので、玄關へ出て、その通りに斷つた。

西洋人は、その日はその儘引き取つたが、二三日すると、又訪れた。そして今度は芳崖の入魂なる狩野友信の紹介狀を持つて來た。それによると、この人はエルネスト・フェノロサといふアメリカ人で東京大學にお雇教師として數年來教鞭を執つて居る學者である、そして東洋美術に對して卓絶した鑑識を持つてゐるといふことである。

これを讀んだ芳崖は、さすがに前のやうに面會を謝絶する譯には行かなかつた。けれどもいかに友信の證明があるにせよ、こんな西洋人に日本畫の眞趣が味解されるわけがないと思つたので、洒落な芳崖は、一つ試驗をして見ようといふ氣になつて、彼を伴なつて舊藩主なる毛利公の邸へ出かけた。

毛利邸へ行つて、芳崖は公爵家所藏の懸物や繪卷物をあ

狩野友信　休碩と號す。畫家。大正元年歿、年七十。

毛利公　舊山口藩主毛利元德。

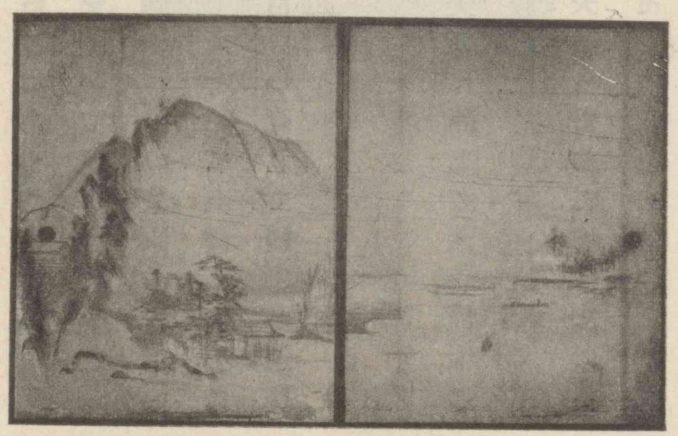




とからあとからと出しては示した。けれどもこのアメリカ人は、唯「ハア〳〵。」と云つて見て居るばかりで容易に感嘆の詞を洩らさなかつたが、最後に女中部屋から曾我蛇足の屏風繪を取り出して見せると、彼は始めて會心の笑みを浮かべた。そして云つた。

「これはいゝ。これは實にすばらしい傑作です。」

これを聞いて、芳崖は驚嘆した。實を云ふと、それまではわざとさまでにもない物ばかりを仰山にして見せたので、價値ある作物は、やはりこの蛇足一つだけ



曾我蛇足　畫家。山雪と稱す。狩野山樂の義子。慶安四年（一三一一）歿、年六十三。

挿繪　曾我蛇足筆山水圖。

であつたのである。そして其の傑作をばわざとむさくろしい女中部屋から引き出して見せたのであつた。

こゝに於て芳崖は始めて胸襟を開いてフェノロサと語り合ふ氣になつた。そして話せば話す程、此の米國の學者の並々ならぬ鑑識と蘊蓄とに感心した。そして西洋人の中にもかういふ人が居るかと思ふと、自分の今までの考へ違ひを、恥ぢずにはゐられなくなつた。

フェノロサは言つた。

「私は國に居つた頃から、日本の美術に對して深い憧憬の情を持つて居りました。けれども腹藏なく申すと、實際日本の土地を踏むに及んで、すつかり失望したのです。過去の日本美術は偉大です。しかし現在のそれは沈衰の極に陷つて居ります。それは今度の共進會を見てもよく分かります。あ





の會には、御國の一流の畫家が幾百と陳列されて居るのに、それが悉く死んで居ます。みんな古人の眞似事をやつてゐるばかりで、獨創といふものが少しもありません。大きな期待を抱いて會場へ行つただけに、私は實にがつかりしました。さうしてもう諦めて歸らうと思つた時に、あなたのお作がふと目に留まつたのです。私ははつとして四邊(あたり)が急に明るくなつたやうに感じました。どうだらう、この恐しい力は！　熱は！　私の求めて居たものはこれだ！　これであつたのだ！

挿繪　芳崖筆鷲圖。

私は思はず口へ出してさう言ひました。こんな優れた作家がゐるのにどうして日本の社會が認めないのであらう。何とも言はないのであらう。とにかく私はその人に會はなければならない。會つてその人の意見をも聞き、私の思つてゐる所をも述べなければならない。さう思つて、此の間もお訪ねしたやうな譯なのです。あの時はお目にかゝれませんでしたが、今日はかうして十分お話を伺ふことが出來て、こんな嬉しい事はありません。」

挿繪　芳崖筆悲母觀音圖。





けれども嬉しかつたのは、たゞフェノロサ一人ではない。芳崖は更にそれよりも嬉しかつた。餘りにも無理解な一般世間の仕向に對しては、さすが不屈の芳崖も、ともすれば絶望的の氣持にならうとしたが、もう今日からは悲しむにも歎くにも及ばなくなつた。彼には今や眞に己を知つてくれる友が出來たのである。

その日を始めとして、芳崖とフェノロサとの交情は日增しに深くなつた。フェノロサの激勵によつて、彼は確固不動の自覺を得た。フェノロサの與へた美術上の新知識によつて、彼は自分の創作に對する理論上の根據を摑んだ。

日本の社會が理解してくれなければ、世界を相手にして描くまでの事だ。」

彼はさうまで考へるやうになつた。

今、上野の東京美術學校第一の校寶とされてゐる「悲母觀音」、ボストン博物館に陳列されて日本美術のために氣を吐きつゝある「鍾旭捉鬼の圖」その他、彼の名を不朽にした幾枚かの大製作は、それから僅か四年、たゞ四年しか生きる事の出來なかつた彼の最晩年の極めて短い期間に描かれたものである。

―(明治美談)―





# 一八　俳句評釋

沼波瓊音

俳句は、どうも初のうちは、何だか判りにくい。テニヲハが省いてあつて、片言のやうでもあり判じ物のやうでもあり、或は謎のやうでもあるといふ感じを誰も持つものである。が、決してさうではない。俳句は讀むものでなくて、味はふものである。理窟をさつぱり除けて了つて、直覺的の感情を基として作りもし又味はひもするものである。人にたよらず自分で味はふに限る。だから極端にいへば、俳句を解釋するのは無意味だともいへる。それで、こゝには唯字句の意義などについては、一通りの解釋を試みようとするだけである。

大原や蝶も出て舞ふ朧月　　丈草

朧月夜に大原の景色を見ると、霞んだ朧月で、ぼうつとして

**沼波瓊音**　名は武夫。名古屋市の人。國文學者。昭和二年歿、年五十一。

大原　比叡山の西麓。

丈草　内藤氏。尾張の俳人。寶永元年(一三六四)歿、

居る所へ蝶が舞つて居る。蝶の色も何も能く見えない。唯朦朧たる中に、ちら〳〵蝶が舞つて居る姿が見えるといふ景色である。此の句を芭蕉が見て、「成程これは佳い句である。」とほめたさうである。夜、蝶が出て舞つて居るといふことが、神韻縹渺たる趣をなして居る。

やせ蛙負けるな一茶これにあり　一茶

一茶は悲慘な家庭に育つたので、弱い者に大變同情をもつて居る。此の句なども、單に滑稽のみでなく、裏には溢るゝ如き同情が見えよう。蛙合戰が始つてゐる、痩せこけた蛙が出て、非常に苦戰に陷つてゐる。そこで一茶が痩蛙の肩を持つて敗けるな、負けるな、俺が此處に居るといつて、頑張つてる所である。一寸したポンチ繪のやうな有樣が目に浮かぶ。何だか痩せた人であるらしく思はれる。

年四十三。

一茶　俳諧寺一茶。小林氏。信濃の俳人。文政十年（一四八七）歿、年六十五。

ポンチ繪　漫畫。



卯の花に月毛の駒の夜あけかな　許六

極彩色の土佐繪か何かのやうな景色である。活動はあまりないが、綺麗な句である。此の句については面白い話がある。去來がかういふ趣向を前から考へて、句にしようと思つて居つた。所が「有明の月にのりこむ。」として、後がどうも巧くつかない。「月毛駒」「葦毛駒」としたり、「の」の字を入れたり、色々苦心しても具合がわるい。終に其の句を棄てた。其の後に、許六が何の苦もなく此の句を作つたのを見て、自分は短才だと悟つたと自白して居る。

白團扇隣の羲之に書かれけり　大江丸

白い團扇を家に置いたら、隣家に居た書の自慢な人が、誠に一人よがりな拙い字をかき散らして行つたといふ意である。「隣の羲之に」といふので嘲つた意味も、又羲之氣取の書天

許六　通稱森川百仲。近江の俳人。正德五年（一三七五）歿、年六十。土佐繪　土佐派の筆に成つた日本畫。土佐權守藤原經隆をその祖となすといふ。

去來　向井氏。肥後の俳人。寶永元年（一三六四）歿、年五十四。

大江丸　大伴氏。大阪の俳人。文化二年（一四六五）歿、年八十六。

羲之　王羲之。晉の書家。最も草書・隷書をよくす。

狗も現れてゐる、パッシーヴの「書かれけり」は、頼みもしないのにといふ迷惑さがこもつてゐる。

聲かれて猿の齒白し峰の月　其角

凄味を詠んだのである。此の句は、「巴峽秋深。五夜哀猿叫月。」など能く詩にある趣から作つたのであらう。猿の齒をとり立てて白いといつた所に、其角の強みが現れて居る。俳諧古選の評には、「雄渾、惜哉、不レ令ニ此老從ニ事於詩一。」と言つてある。

木枯の果はありけり海の音　言水

木枯が長く長く吹き續いて居る。非常な音をして吹いて居る。其のうちに暮方にでもなつたのであうか、それがばつたり止んで世間が靜かになつた。すると向うの方で、どーつと云ふ音がする、波の音だ。浪がまだ騒いでゐるんだ。さういふ所を詠んだのである。此の句は、當時大層評判な句で、其の爲

其角　榎本氏。江戸の俳人。芭蕉の高弟。寶永四年（一三六七）歿、年四十七。

巴峽　巴（四川省重慶）にある谿流の名で、揚子江の上流にあり。

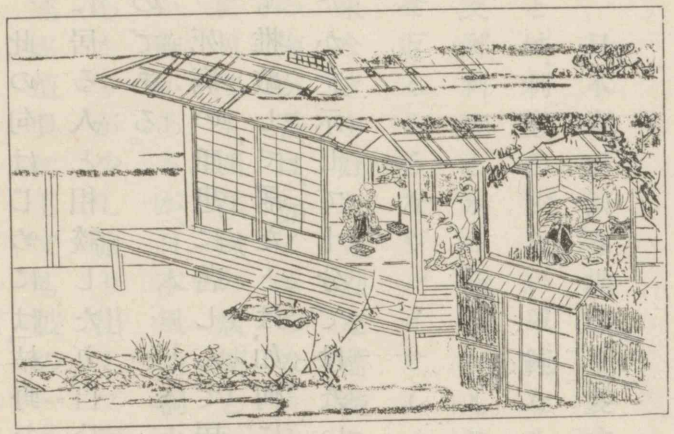
言水　池西則好。俳人。享保七年（一一三八二）歿、年七十三。



に、「木枯の言水」といふ異名を附けられたといふことである。

旅に病んで夢は枯野を
かけ廻る　芭蕉

芭蕉病中の吟、最後の句である。芭蕉は元祿七年十月の十二日に歿したが、此の句の出來たのは八日である。旅行中病氣になつて、それが大變重くなり、心も確でない、夢幻の境に彷徨して居る。其のとき夢心に枯野を驅け廻るやうに感ずるといふのである。重い病氣をやつた者は、心持がむしやくしやして物が分からなくなつて、非常に煩



元祿七年　東山天皇の御代、一一三五四）。

挿繪　病中の芭蕉。（芭蕉翁繪詞傳）。

悶するやうな場合に、こんな感じを經驗して居るであらう。

此の句はじめには「枯野を廻る夢心。」としたがいろ〳〵側に居る人と相談したり、自分でも考へたりして、かう直したのである。

死病の重患に苦しんで居ながらも、此の最後の句をかくも推敲して居たとは、如何に此の詩人が斯道に忠實であつたかを示して十分ではないか。

―（俳諧講演集）―





## 一九　日本趣味

佐々政一

日本人が淡き趣味を愛するのは、その天賦であらう。淡いとは、刺激の少ない單純なものの義で、例へば西洋料理とか支那料理とかの脂濃いものは、由來日本人の嗜好に遠い。咽せ返るやうなヴァイオレットの薫よりは、幽かな薫香の覺束なきを好む。芳烈な薔薇の香は賤しまれて、有るか無きかの梅が香は、「如くものなし。」と稱へられる。從つてこれを器物に見ても、西洋風の煖爐といへば必ず凸凹や六角の煩はしい飾があるが、日本風の桐火桶は極めて單純な丸形で、胴のあたりが少し張り出して居るといふに過ぎぬ。食物を口に運ぶ道具にしても、彼の一々込み入つた彫刻などの有るものに比すれば實に同日の論ではない。その茶匙にしても、日

**佐々政一**　醒雪と號す。京都の人。國文學者。文學博士。東京高等師範學校教授。大正六年歿、年四十六。

如くものなし　新古今集に、「てりもせずくもりもはてぬ春の夜のおぼろ月夜にしくものぞなき。大江千里」と。

本の茶席に用ゐるものは、竹の筐の一端を曲げてざつと削つただけのもので、よしや贅澤な象牙製のものであつても、これに彫刻などを施すことは日本趣味の許さぬ所である。かかる傾向は、武家主義の質朴な文化に因り、或は禪宗の端的な教義に由つて益〻培養せられ來つたものである事は、敢へて疑ふべきではないが、その素因は已に平安朝に存して居る。かの源氏物語に攝政太政大臣家と二條大臣家とを比較して、前者のたゞ何となく由ありげに奥床しい有樣と、後者の今樣風に綺羅びやかなる物のみをいやが上に列べられたことを敍して、一も二もなく二條家を無趣味なりと斥けて居る事や、或は枕草子に梨の花をほめて、よく〳〵見ればその花瓣の一隅に覺束なき幽かなる色がついて居るのが面白いといつた事などを思ひ比べても、或は歌人等が霜

源氏物語　五十四帖。紫式部の作りし平安朝時代の小說。

攝政太政大臣家・二條大臣家　ともに源氏物語の中に描かれし權力ある廷臣の家。

枕草子　清少納言の隨筆。源氏物語と同時代に出づ。

梨の花をほめて云々　第三十四段「木の花は」の條。





に惱んだ菊の花を面白く移ろうたと稱へて、その紅紫爛漫たる眞盛りを却つて等閑にして居る事などを見ても、所謂「こちたく、けざやかなる」ものは、その好む所でなかつた事が極めて明かである。

徒然草はやゝ後のものであるが、その著者は實に平安朝趣味の渴仰者で、田舍者に依りてはじめられようとした新しい趣味に對して極力反抗した人である。その古風なものが物ごとに「やすくすなほ」であつたのを慕つて、今樣の複雜な絢爛なものを排斥して居るのは、最も著名な事である。かの內裏の櫛形の窓が、昔は木の緣もとらず、唯圓く穴を穿つたのみであつたのに、新造營の時に、その窓に謬つて緣をとるのみならず、その形が少し複雜なものになつて居たので、故實家がこれを見つけて改造させたといふ事をさも重大

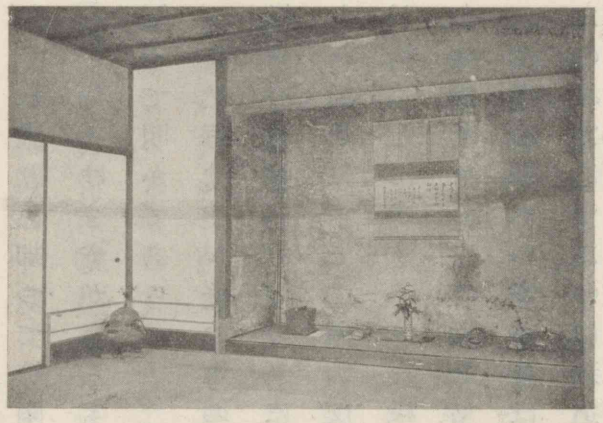
徒然草　吉田兼好の隨筆。鎌倉時代に出づ。

內裏の云々　第三十三段「今の內裏の作り出されて」の條。

櫛形の窓　清涼殿のうちにある窓。

な手柄のやうに記してゐる所を見ても、如何に單純を愛したかといふ事が容易く想像されよう。

古の人は烈しい刺激を忌んで、幽かな淡い趣味を樂しんだ。かの武陵桃源にも比すべき平安朝の長閑けき都をすら、動もすれば尙刺激に堪へずとして太古のまゝの深山に隱れたものもある。都鄙漸く戰亂の塵に汚さるれば、乃ち四疊半の茶屋に立て籠つて、此處に塵外の閑寂を味はうとした。茶器も膳部も、目をひく色香を避けて、床の間には淡彩の小幅をかける。若し一輪の花を生け



武陵桃源　支那湖南省に在り。秦民の亂を、避けて住みし地。傳說化して、仙鄉を傳へらる。

挿繪　茶室。





ようとすれば、かの小幅をさへ取り去つて花のみの床にしたいといふのは實に周到な用意である。曾て千利休の草庵に朝顏の咲きそろつた頃、豐公はその眞盛りを見ることを約して、拂曉その茶室を訪うた。すると利休は悉く庭先の朝顏を拂ひ捨てて、唯一輪床の間に挿して置いたといふ事である。蓋し紅紫妍を競ひ艶を爭ふが如きは、最もその趣味に遠いのである。この趣を解し得ない者は、思ふに日本の文藝を解する資格のない者である。

三十一文字の和歌、十七字の發句は、この一輪の朝顏である。その五音七音の外に何等の珍奇な複雜な形式をも求めないのは、單純な桐火桶に似て居る。更にその趣味の淡々として人の耳目を聳動するものの無いのは、かの薔薇の香を賤しむ心から來たものである。思ふに一輪の朝顏よりも朝

千利休　名は宗易。和泉國堺の人。信長・秀吉に歷仕した茶人。千家流茶道の祖。天正十九年（一五五一）歿、年七十一。

顔人形の花々しきを好み、桐火桶よりも飾付の煖爐を好むのは、特別の修養なき人の狀態である。殊に薔薇の香水は、如何なる人の鼻にも感ぜられるが、薫香の幽かなるは、香道に入るに非ざれば知りがたいのである。

こゝに於てか、日本の所謂高尚な趣味は、これを西洋趣味に比しては普遍性を缺いて、特別なる修養のある人の間にのみ味ははれるといふ傾向を生じた。例へば、今日普通の教育を受けた青年に、初めて脂濃い西洋料理を味ははせて見ると、最初はその淡白ならぬを厭ふかも知れぬが、これに慣れることは頗る早いに拘らず、會席料理の妙味を解せしむることは容易の業ではない。況や菊人形の美しいことは、生まれながらにして知つてゐるが、一輪の投げ込みに趣味を感ぜしむるには、多大の修養を經なければならぬ。

會席料理　茶湯の懷石風に出す饗膳。





日本人は本來、淡白なものを好む傾向を持つて居た。併しこの傾向を基礎として漸次に涵養せられて來た極めて淡い、極めて幽かな趣味といふものは、他の濃厚なものよりも一層味はひ難い程度にまで進んで居るのである。我が國の文藝が多く普遍性を失つて、俳諧は俳人のみに、和歌は歌人のみに歡ばれ來つたのは、こゝに主因があると信ずる。

淡きを好む傾向は、更に他面に於て我が文藝殊に詩歌の類をして實生活と甚しく隔絶せしむる原因をなした。抑實生活上の事は常に人間の利害の念を喚起するものであつて、その利害の念は、やがて人生に對する烈しい刺激である。淡々たる趣味の鑑賞にのみ專らなる精神が、かゝる題目を避けようとする事は當然の傾向であらう。されば古へ萬葉時代にあつては貧民が租稅の誅求に惱む有樣も歌はれた。

社會生活の道德的制裁も敎へられた。然るに平安朝に入つては、これらのものは總べて歌道の好題目に非ずとして排斥せられ、唯偏に風流な雪月花にのみ憧るゝものとなつたのである。チャムバーレンは日本人の所謂詩的といふ語が餘りに偏狹であるのを疑つて、世界の何れの國にも見ない所であるといつて居るが、げに我が國の詩歌の題材が極めて狹いといふ事は否むべからざる事で、この傾向が歩一歩甚しくなると共に、益〻實生活に遠ざかつて、特別の修養のない人には、殆ど沒交渉のものたらんとするに至つたのである。これ亦普遍性を失つた一原因であらう。

顧みれば我が國の文藝が淡い趣味の上に立つて居ることは、上來說き來つた諸原因がその根柢を成して居るものである。一の淡い趣味といふ事は、種々の方面から、我が實生

チャムバーレン（1850—1935）言語學者。イギリス人。夙に我が國語國文學を研究し、明治十九年我が國に來り、東京帝國大學講師となる。





活と我が文藝とを隔絕せしめて、終にその普遍性を失はしめた。かくして新日本の青年は、宛も會席よりも西洋料理を好むやうに、一も二もなく西洋文藝のみを崇拜するに至つた。彼等は香水の香に醉つて、薰香の幽かな香りは全く感じ得ない有樣である。千年以來、我等の祖先の間に養はれ來つた彼の淡い、なつかしい、奧床しい趣味は、今將に亡びようとして居る。

思ふに普遍性を失つた文藝は、健全なる發達を遂げた者といふべきではなからう。併しながら、其處に宿つた淡い趣味、幽かな匂は我が國民性に獨得のものである。我等は果して默然としてその亡びゆくに任せてよいであらうか。

—（醒雪遺稿）—

# 二〇 歌御會始

鳥野幸次

中古時代和歌の盛興するにつれ、諸種の歌會も行はれて、公儀としても、中殿歌會と稱し、花月の良辰を選んでこれを催され、御前披講の盛儀もあつたけれども、毎月、月次の歌會を開き、又恒例として年の初に御會始を催さるゝ事に定つたのは存外新しく、後柏原天皇の御代室町時代の末からである。それが維新前まで引續き行はれてゐたが、これはいふまでもなく、禁中のみのことで少數の公卿・殿上人の外は關知することの出來ぬものであつた。然るにこの御式が明治の天朝にも繼續され、殊に明治七年の御會始から、衆庶の詠進をも差し許される事になつたのは、一にはこの道を重んぜられ、一には庶民と此の樂を同じくしようとの大御心か

**鳥野幸次** 明治六年福井市に生る。宮内省御歌所寄人。國學院大學教授。

中殿 清涼殿の別稱。

後柏原天皇 第百四代。





ら出たもので、誠に畏れ多くもまた有難いことである。

御式は大抵一月十八九日、宮中鳳凰の間に於て行はせられ、預選歌と稱して豫て詠進歌の中から選んだ六・七首のものをも、顯官・皇族、さては兩陛下の御歌と共に御前披講をさるゝのであるから、その選に入つた者の名譽は非常なもので、決して古の勅撰和歌集に選入されたぐらゐの比ではないと思ふ。

それ、皇室と和歌との關係は斯くの如く密接であるのみか、我等が四十五年間、天津日と仰ぎ奉つた明治天皇は、

言の葉の道の奥までふみわけむ
まつりごと聞くいとまいとまに

ひとりつむ言の葉草のなかりせば
なにに心をなぐさめてまし

言の葉の、の御製 明治三十六年の御作。

ひとりつむ、の御製 明治三十八年の御作。

と詠ませられた程、この道に御志深く、また極めて御堪能にわたらせられ、且つこの和歌については、

言の葉のまことの道を月花の
もてあそびとは思はざらなむ

白雲のよそに求むな世の人の
まことの道ぞ敷島のみち

の御製によつて拜察されるが如く、最も深い御考を持たせられた。されば、これが普及といふことについても、素より叡念あそばされたもので、殊に御會始については、

千萬の民のことばを年毎に
すゝめさせても見るぞたのしき

と仰せ出された程のありがたい思召がこもつてゐる。

昭憲皇太后も、また、日月と竝ばせおはしまして、この方の

言の葉の、の御製　明治四十年の御作。

白雲の、の御製　明治三十七年の御作。

千萬の、の御製　明治四十一年の御作。





御至り深く、されば、女官達に對しても御奬勵があつたと見えて、御集の「秋のはじめ」といふ御題に

ちゝと鳴きそめし蟲の聲や珍らしかりけむ、何事をか語り合ひたりし女房の聲も、とみに止みぬ。これなむ、日毎に御題たまはる人々なれば、「又の日は必ず今鳴く蟲の聲よりもなつかしう詠みて奉るならむ。」といひしかば、「思ひもよらぬ仰せ言かな。」と、ことさらにいらへするも、なか〳〵に興あり。

と仰せられ、又「年のくれ」の御題には、

さぶらふ女房たち、つぎ〳〵に物たまはるめり。さる中にも、歌御會始のこと心にかゝりて語りあへり。「年あけなば、にぎははしうて、宮仕も事しげくやならむ。早う歌もよみおかばやと思へど、まだ一首だに。」といふもあり、

或は「選ばるべきは誰がにかあらむ。」といふもありて、いとをかし。

と記されてあるのを拜見しても、後宮のこの事を如何に重視せられたかが伺はれて、尊いことである

而してこの兩陛下の思召は、大正・昭和の御代にも御繼承になつて、今日も明治の御代と御變りがなく、毎年つゞいて此の盛儀を行はせられるのは、何たる畏さであらう。

されば上下一般に是非とも和歌を詠み習つて、一は聖旨に副ひ奉り、一は以て美しい情操を養ふよすがとするのが日本國民の務であらう。もつとも、詠進歌の數は年々增加して、今は何萬にも達するのであるが、此の御盛事に對し奉つては、余はなほその數の僅少なるを憾まざるを得ぬ。

—(四季の趣味)—





## 二一 各民族の正月

西村眞次

正月といへば、日本では羽子をついたり、凧をあげたり、歌留多を取つたり、屠蘇をくんだり、雜煮を祝つたりするが、それは必ずしも日本固有の慣習であるのではなくて、それぞれ別の起原を持つてゐるやうである。さうした風に、或民族の慣習風俗といふものは、自他のものが混同してゐるのが多い。

各民族は、正月についてどんな名前をつけ、どんな儀式を行ひ、どんな感じを持つてゐるか、第一に正月についてはどんな名前がつけられてをり、且つ一年はいつからかぞへはじめられてゐるかを調べて見ると、各民族によつてそれぞれ異なつてゐる。

**西村眞次** 明治十二年、三重縣に生る。歷史家。文學博士。早稻田大學教授。

ヴォーグルといふシベリヤの住民は、年のはじめを九月と十月の間とし、正月のことを「小秋狩月」「小夜」或は「秋月」といつてゐる。オスチャクではウグリイのものは一年が十三ケ月で、正月は四月にはじまり、名を「卵産み月」といふ。イエニセイスクに住む彼等の正月は五月にはじまり、「夏月」といふ名を持つてゐる。またタタア種では正月を「森月」或は「安樂月」と呼ぶが、それは九月を以てはじまり、そのころから彼等が森林に入つて狩をするからである。

ブリヤート人は新年から起算して、正月のことを「小河のこほる月」といつてゐる。ツングース族においては、一年を夏と冬とに分け、夏の正月を「イラガ」といふ。その意味は「はへ」または「ぢむし」といふことで、正月からぼつ〳〵葉がめぐみ、花がさき始める。冬の正月は「オクチ」といふ。多分「鳥おひ」の意で、

オスチャク　オビ河とイエニセイ河との間に分布してゐるフィン系統の民族。

イエニセイスク　シベリヤのイエニセイ河に沿へる商業都邑。

ブリヤート人　蒙古種族の一で、シベリヤと北部蒙古とに住む。





そのころから雹がふり初め、從つて毛皮が用ゐ初められる。サモイエッドの間では八月を正月として、それを「落ち葉月」といつてゐる。

カムチャッカのイタルメンは一年を二ケ月に分け、夏年を五月から初めて、其正月を「ボト鷸月」といふ。それはその頃ボト鷸が來はじめるからである。冬年は十一月からはじまつて、その正月を「蕁麻月」といふ。そのころからいらくさが收穫され、日にほされるからである。ギリャーク族の間では、一年を十二ケ月としてゐるが、さてその月々には異名が二三ある。正月のことを「鮭漁月」或は「銛の月」といふ。

エスキモーでは一年を十三ケ月に分けて、その各〻の月に對する名稱は、部族部族で異つてゐるが、グリーンランドに住んでゐるものは、冬至から月をかぞへ初める。英領コロム

サモイエッド　西部シベリヤ、イエニセイ州北部の全域に分布する種族。

カムチャッカ　シベリヤ東部の州名。

ギリャーク族　樺太北部のシベリヤやアムール河下流地方に住む種族。

エスキモー　北アメリカの極北地方に住する民族。

グリーンランド　北米東北。世界第一の大島。

英領コロムビヤ　北米カナダの西南部。

ビヤの一種族は正月を「第一月」といひ、以下順々に數字で呼ぶが、別に異名がついてゐて、正月のことを「這入り月」といふ。それは其頃から各家に這入りはじめるからである。

これから推して見ると、日本の歌などに現れる月名が、總べて氣候或は各季節の自然現象を取つて付けられてゐるのと同じく、民族それ自身に最も關係の深い重要なものに因んで月の名をつけてゐるやうに思はれる。それらは同時に、その民族の正月についての感想を形作るもので、私たちが正月には年の初めだといふ感じから、總べての物を物新しく思ふやうに、各民族とも、度合こそちがへ、さうした感情を起すことには變りがない。たゞ感じ方に強弱の差があるばかりだ。

我國をはじめ支那などで正月を祝ふのは、淵源が餘程古





いやうである。私の考では、周の正月は冬至（舊十一月中）であつたといふから、その日を一年の出發點として、元日卽ち一年の第一日として祝はれたものであると思ふ。冬至においては、北半球の晝間は最もみじかく、正午になつても日の高度が極めて低い。それは太陽が黃道上最南點―春分點から二百七十度、卽ち秋分點から九十度の距離にある―にある時であるから、いはゆる「陰氣がきはまつて一陽の來復」しはじめる時である。短い、つめたい、くらい冬の日のねむりから、萬物が長い、暖かい、明るい、春の日の目ざめに移りゆく回轉點である。それでそれを年のはじめとして、新しい生活の幕を開かうといふつもりで祝つたものであらう。正月元日を祝ふといふことは、おそらく太陽崇拜と深い關係があるだらう。北半球の人に取つては、太陽が南のはてに去つた時は

最もさむい時であつて、何となく肉體がなえ、精神もまたちぢまつて、潑溂たる生活をいとなむことが出來ないのに引きくらべて、夏至の如く太陽が北のはてに來てゐる時は心身共に盛んになつて、自づと元氣がわいて來るやうに感ぜられる。それ故、その日が去つて春の日の來ることは、そこの住民らに取つて嬉しく思はれたに相違ない。そこで冬至を祝つたものが、後には二十四季節の中の一つとして數へられるのみになつたのであらう。

古代人がかうした太陽の運動についての確實な知識を得たについては、長い長いいはれがあるのであつて、久しい間の經驗から日影によつてそれを知るに至つたのである。支那の暦法はアッシリヤ・バビロニヤ・エジプトからつたはつたもので、その淵源は極めて古いといはれてゐる。





日本の太陰暦の計算法は、支那からつたはつたものに相違ないが、固有文化の一つとして、日本人の祖先は支那から暦法のつたはる前に、既に一種の原始的なこよみをもつてゐたに相違ない。月の異名は日本にはいくらもあるが、正月を「む月」といひ、二月を「きさらぎ」、三月を「彌生」、四月を「卯月」といふ如きは前述の北東アジヤ民衆の正月の稱呼とくらべて見て、同一の文化段階にあるものと見てもさしつかへがない。

私たちの祖先は、月や星もをがんだけれど、天體の中で最もたふとく感じ、最もあつくうやまつたものは太陽であつたから、月・星の運動よりも太陽のそれの方がはるかに注意せられ、その結果、それについての知識が可なり古い時代から發達してゐた。私たちは今太陽をヒといふが、「晝」を意味す

るヒルは「日」に動詞の語尾がついて動名詞となつたものである。朝鮮語イルも矢張りこれと同源であらう。アッシリヤの最高神イルは別名をラーといふが、エジプトにおいても日神オシリスの別名をラーといふ。南洋の太陽神は皆レレとか、ララとかラ行にかゝる音をその名に負うてゐる。太陽崇拜は古い慣習で、日本のそれも矢張りエジプト・アッシリヤと關係があるやうに思はれる。さうした太陽崇拜慣習があつたからこそ、陽氣の回復する冬至を新年として祝つたのである。

むかしから日本人は日の出をよろこんだ、朝廷のおごそかな儀式は、未明から朝日ののぼる時に行はれるのが常であつた。今日でも一般に日の出がをがまれるが、初日の出は殊に強く崇拜せられてゐる。別に宗教的意識はなくとも、海

オシリス　エジプトにて、すべての靈威の最高者と仰がるゝ神。

冬至　十二月二十二日頃。





の彼方、水平線上にのぼる朝日の影を見ると、崇嚴の氣に打たれないものはない。原始時代にこれを神格化して禮拜したのはまことに無理のないことだ。

かうした次第で、私は、正月の祝賀は冬至の祝賀に起原を發し、冬至の祝賀は太陽崇拜と關係があると考へたいのである。現に元日、四方拜の如き方位に關係のある祭儀が行はれるのは、私の假定を確實にする一つの證據である。嚴肅な氣分で儀式を行つて、今年を去年よりもよりよくおくらうとすることは、一さいの慣習をすてようとする近代人には滑稽かも知れないが、努力を新にしようとする私たちには、必ずしも意義のないことではない。

―（民俗斷篇）―

# 三　みくにまなび

平田篤胤

學問にはいろ〳〵ある。その中に何の學問がいつち大きいぞといふに、ちと自分勝手のやうなれども、皇國即ち我が國の學問ほど、大きいものはないでござる。なぜといふに、まづ近く儒學と佛學との上で申さば、儒者は最初四書・五經とか、十三經とかいふ類の書物を讀むことを覺え、また左・國・史・漢といつて、左傳といふもの、國語といふもの、史記といふもの、漢書といふものなどをあら〳〵讀んで、さて漢文を綴る方を覺えたり、そのふだんの口ずさみに、詩を作ることでも覺えると、もう儒者といつて通られるが、何のこれしきの書物を讀んで、これしきのことを覺ゆるに、さして難いことはありやいたさんでござる。大方世間の儒者は、皆このくらゐ

平田篤胤　出羽の秋田の人。國學四大人の一。天保十四年(一五〇三)歿、年六十八。

四書　大學・中庸・論語・孟子。
五經　易經・書經・詩經・春秋・禮記。
十三經　周易・尚書・毛詩・春秋左氏傳・春秋公羊傳・春秋穀梁傳・周禮・儀禮・禮記・孝經・論語・孟子・爾雅。
左傳　春秋左氏傳。
國語　春秋時代の八國の事を記せる書。
史記　軒轅氏より漢の武帝に至るまでのことを記せる書。
漢書　前漢の歴史を記せる書。





なものでござる。

さてその儒者に比べては、出家の方がよつぽど廣い。なぜといふに己が是非讀まねばならぬと極めた俗にいふ經文が五千餘卷、馬につけたならば、七八駄あらう。それをみんな讀まず、十分の一を讀んだところが、ざつと儒者がおもと讀まねばならぬ書物の一倍もあるでござる。それのみならず、儒者は佛書を讀まんでも、事が缺けぬによつて、とんと讀まず、たまさかそれとことかはり、儒者のおもと見る書物をば、子供の時から文字を知る爲に讀んで置く。また詩も漢文も儒者と同じ

挿繪　平田篤胤像。

やうに作りもする。そこで僧徒の學問は儒者よりは廣いでござる。

さて皇國の學問がいつち廣いといふ故は、右申す通り、儒學・佛學を始め、種々さま〳〵の學問があつて、その道々のころと事とが、盡く皇國の學びごとに混雜して、譬へば、彼の八紘九野の水、天漢の流これに注がずといふことなしといふ如くでござる。その通り入り混つてある故に、人の心もそれに從つて移り、いづれを是とも、いづれを非ともわかちかねて、いはばまごついて居ることが多くある。それ故に、その混雜をつぶさに分けねば、眞の道の有難き所も顯れず、その混雜をより分けて、眞の道の害となることをいひ顯さうとするについては、よく先方のことをも知らねばならず。かの唐人蘇子由といふものの、「善與人言者、因其人之言而爲之言、則天下之辯者服矣。云々」と申したる如く、此方のことばかりいつたのではいかず。例へば、僧徒を諭すには佛書でいふと、ぎうの音も出ず。儒者を諭すには儒書で論ずれば、猫に追はれた鼠のやうにかしこまる。されば皇國の純らと正しい道を得ようとするには、それに心得なくてはかなはぬことでござる。殊にもろ〳〵の學問の道、たとひ外國のことにしろ、皇國人が學ぶからは、そのよきことを選んで、皇國の用にせうとのことでござる。さすれば、實は漢土は勿論、天竺・阿蘭陀の學問をも、すべてみくにまなびといつても違はぬほどのことで、卽ちこれが皇國人にして外國のことを學ぶものの心得でござる。

—（古道大意）—

蘇子由　蘇轍。子由はその字。兄軾と共に學者として有名。宋代の人。徽宗の政和二年（西紀一一一二）歿、年七十四。

# 二三　人臣の道

北畠親房

凡そ王土にうまれて、忠を致し命を捨つるは人臣の道なり。必ずこれを身の高名と思ふべきにあらず。然れども後の人を勵まし、其の跡を愍びて賞せらるゝは、君の御政なり。下として競ひ爭ひ申すべきにはあらぬにや。ましてさせる功無くして過分の望を致すこと、自ら危むる端なれど、前車の轍を見ることは誠にあり難き習なりけむかし。中古までは、人のさのみ豪强なるをば戒しめられき。豪强になりぬれば、必ず驕る心あり。果して身を滅し家を失ふ例あれば、戒しめらるゝも理なり。

鳥羽院の御代にや、諸國の武士の源平の家に屬することを停むべしといふ制符たび〳〵ありき。源平久しく武を執

**北畠親房**　吉野朝の忠臣。師重の子。足利尊氏の叛するや吉野朝を擁護し、子顯家・顯信と共に奔走す。正平九年（一〇一四）薨、年六十三。

**王土**　天皇の治め給へる土地。

**跡**　こゝにては子孫。

**前車の轍**　晏子春秋に、「諺ニ曰ク、前車ノ覆ルハ後車ノ戒也。」

**鳥羽院**　第七十四代鳥羽天皇。

**制符**　禁制の官符。禁止の公文。





りて仕へしかども、事ある時は宣旨を賜はりて諸國の兵を召具しけるに、近代となりて、やがてかたらはるゝ族多くなりしによりて、此の制符は下されき。果して今までの亂世の基なれば、云ひがひなき事になりにけり。此の頃の諺には、一たび軍に驅合ひ、或は家の子・郎從、節に死ぬる類もあれば、「わが功におきては日本國を賜へ。」若しは「半國を賜はりても足るべからず。」などぞ申すめる。まことにさまで思ふことはあらじなれど、やがてこれより亂るゝ端ともなり、又朝威の輕輕しさもおし量らるゝものなり。

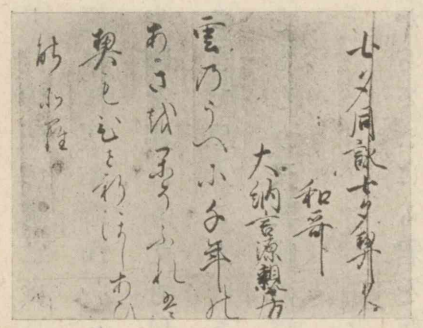
「言語は君子の樞機なり。」と云へり。あからさまにも君を蔑にし、人に驕ることはあるべからぬ事にこそ。堅き氷は霜を履むより至る習なれば、亂臣・賊子と云ふものは、その初、心言葉を愼しまざるより出で來るなり。世の中の衰ふと申すは、

**家の子**　一族子弟。

**言語は云々**　易經、繫辭傳に、「言行者君子之樞機。」樞は戸の「くるゝ」機は物事の發するところ。共に物事の最も肝要なるところの謂なり。

日月の光の變るにもあらず、草木の色の改るにもあらじ。人の心の惡しくなり行くを末世とは云へるにや。昔許由と云ふ人は、帝堯の國を傳へむとありしを聞きて、潁川に耳を洗ひき。巢父はこれを聞きて、此の水を だにきたながりて渡らず。その人の五臟・六腑の變るにはあらじ。能く思ひ習はせる故にこそあらめ。

なほ行末の人の心思ひやるこそ淺ましけれ、天方己一身は恩に驕るとも、萬人の怨を殘すべき事をば、などか顧みざらん。君は萬姓の主にてましませば、限りある地をもちて限りなき人に分たせ給はん事は、推して測り奉るべし。若し一國づつを望まば、六十六人にて皆塞がりなむ。一



堅き氷云々　易經、坤卦に、「履レ霜堅氷至ル。」

亂臣賊子　國を亂し、君父を害する惡人。

許由・巢父　共に支那古代の隱者。

潁川　支那河南省にあり。

挿繪　北畠親房筆蹟。

七夕同詠七夕契久　和歌

大納言源親房

雲のうへにふる年の
あきなれば契もひさしほ
しあひのそら

萬姓　天下の萬民。





郡づつと云ふとも、日本は五百九十四郡こそあれ、五百九十四人は喜ぶとも、千萬人は喜ばじ。況や日本の半ばを志し、みながら望まば、帝王はいづくを知らせ給ふべきにか。かゝる心の萌して、詞にも出で、面に恥づる色のなきを謀叛の初と云ふべきなり。

昔の將門は、比叡山に登りて、大内を遠見して謀叛を思ひ企てけるも、かゝる類にや侍りけむ。漢の高祖の天下を取りしは、蕭何・張良・韓信が力なり。これを三傑といふ。中にも張良は高祖の師として、籌を帷幄の中

挿繪　北畠親房肖像。

將門　平將門のこと。

高祖　支那漢の高祖。字は季。沛の人。漢朝を創め、長安に都す。在位十二年。

蕭何　前漢の三傑の一人。沛の人。常に高祖に從ひて、主として軍糧を辨ず。後故ありて獄に下され、惠帝二年卒す。

韓信　三傑の一人。淮陰の人。高祖に從ひて秦を亡し、天下を定めて、齊王に封ぜられしが、高祖の十一年殺さる。

にめぐらして、勝つ事を千里の外に決するはこの人なり。」と宣ひしかど、張良は驕ることなくして、留といひて少しきなる處を望みて封ぜられにけり。あらゆる功臣多く滅びしかど、張良は身を全くしたりき。近き代の事ぞかし、頼朝の時までも、文治の頃にや、奥の泰衡を追討せしに、自らむかふ事ありしに、平重忠が先陣にてその功勝れたりければ、五十四郡の中いづくをも望むべかりけるに、長岡の郡とて、極めたる少しき處を望み賜はりけるとぞ。これは人に廣く賞をも行はしめむが爲にや。賢かりけるをのこにこそ。又直實と云ひける者に一處を與へ給ふ下文に、「日本第一の剛の者なり。」と書きて賜ひてけり。一とせ、かの下文をもちて奏聞する人のありけるに、褒美の詞の甚しきに、與へたる處の少き、誠に名を重くして利を輕くしける、いみじき事と口々に褒め合へりけり。

これまでの心こそなからめ、事に觸れて君を落し奉り、身を高くする輩のみ多くなれり。ありし世の東國の風儀も變り果てぬ。公家の古き姿もなし。いかになりぬる世にかと歎き侍る輩もありと聞えしかど、中一年ばかりは誠に一統のしるし覺えて、天の下擧り集りて都の中はえ〴〵しくこそ侍りけれ。

—（神皇正統記）—



籌を云々　史記、高祖本紀に、
「夫レ籌策ヲ帷幄之中ニ運ラシ勝ヲ千里之外ニ決スルハ吾子房ニ如カズ。國家ヲ鎮メ百姓ヲ撫シ餽饟ヲ給シ糧道ヲ絶タザルハ吾蕭何ニ如カズ云々」
泰衡　藤原泰衡。秀衡の子。陸奥の藤原氏第四代の主。文治五年（一八四九）頼朝に征せられて歿す。年三十五。
平重忠　畠山重忠のこと。
五十四郡　昔時陸奥國を五十四郡に分つ。
長岡　今の宮城縣遠田郡田尻・富永・中坪の諸村に當るが如し。
直實　熊谷直實。直貞の子。宇治川・一の谷に從軍して功あり、後、出家して蓮生坊と稱し、承元二年（一八六八）寂す。
下文　幕府より所領をあてがふ時などに與へたる文書。



公家　朝廷。朝家。
中一年　建武中興をいふ。
**神皇正統記**　北畠親房著。六卷。神代より第九十七代後村上天皇に至るまでの史實を記し吉野朝の正統なる由を陳べたり。

# 二四　刑前の書

吉田松陰

平生の學問淺薄にして、至誠天地を感格する事出來不申、非常の變に立到り申候。嘸々御愁傷も可被遊拜察仕候。

親思ふ心にまさる親心けふの音づれ何と聞くらん

乍去、去年十月六日差上置き候書、跡より御覽被遊候はば、左まで御愁傷にも及び申間敷と奉存候。尙又當五月出立の節、心事一々申上置き候事につき、今更何も思殘候事無御座候。此の度漢文にて相認め候語諸友書も御轉覽可被遊候。幕府正議は凡て御取用無之、夷狄は縱横自在に御府内を跋扈致し候へども、神國未だ地に墜ち不申、上に聖天子あり、下に忠魂義魄充々致し候へば、天下の事も餘り御力御落無之候樣奉願候。隨分御氣分御大切に被遊、御長壽を御保可被遊候。

以上

十月二十日認置　寅次郎百拜

家大人膝下
玉丈人膝下
家大兄座下

兩北堂樣隨分御氣體御厭ひ專一に奉存候。私被誅候とも首にても葬り吳れ候人あらば、未だ天下の人には棄てられ不申と御一笑奉願候。兒玉小田村久坂の三妹へ、五月に申置き候事忘れぬ樣御申

**吉田松陰**　幕末の志士。通稱は寅次郎。長州萩の藩士。安政六年(一八五九)刑死、年二十九。

去年　安政五年。
當五月　安政六年五月二十六日萩城出發。

十月二十日　松陰の處刑は安政六年十月二十七日

家大人　松陰の實父杉百合之介。
玉丈人　松陰の叔父玉木文之進。
家大兄　杉民治。

聞奉」賴候。吳々も人を哀まんよりは自ら勤むること
と肝要に御座候。私首は江戸に葬り、家祭には私平
生用ゐ候硯と、去年十月六日呈上仕候書とを神主
と被」成候樣奉」賴候。硯は己酉の七月か、赤馬關廻浦
の節買得せしもの、十年餘著述を助けたる功臣に
候。
松陰二十一回猛士とのみ御記し奉」賴候。

—(吉田松陰全集)—

己酉　嘉永二年(一八五〇九)





## 二五　日本人の創造

尾上八郎

改めて言ふまでもなく、日本人獨自の力で作り出したものは、古來極めて少ない。この間に於て、日本人が、他から暗示を得ず、模範をも示されずして作り出した文化の形式がある。それは、自分の知つてゐるところ、著しいと考へるところのものは歌である。昔の人が、「これのみぞ人の國より傳はらで神代を受けし敷島の道」と言つたのを、自分は讀過一番、歌人がわが道尊しとの念から作り出した勝手の理窟だと思つて居たのであるが、今日になつて考へて見ると、まことにその通りである。孰れの國でも、最初の文學は韻文である。それがまづ發達する。散文はそれに次いで盛んとなる。我が國でもまさにその通りであるから、歌が神代を受けたからと

**尾上八郎**　號は柴舟。明治九年、岡山縣津山市に生る。文學博士。國文學者。歌人。東京女子高等師範學校教授。

いつて、敢へて誇るに足らないやうであるが、他の文化の種類が或は支那、或は印度、或は歐米諸國の影響を受け、指導を得て居るのに比べると、この歌の、昔の儘で傳はつて、內容的に甚しい變化を蒙らず、形式的に著しい差異を示さずして今日に存して居り、更にそれに從事するものが、國民一般にあるといふことは、奇蹟といつても差支はないであらう。程度は種々あるがまづ到る處に歌人が居り、行くところに詩人が住み、それが三十一音の形式によつて歌を作つて居り、それによつて歡樂し親睦して居る國は、恐らく何處にも存在しないであらう。それは力說するに足らぬとしても、我が國獨自の形體と內容とを持つた歌は、日本人獨自の創作であり、更に他の追隨を許さぬものである。勿論、歌も時代につれて變化があり、消長もあるので、多少ともに外來思想と連





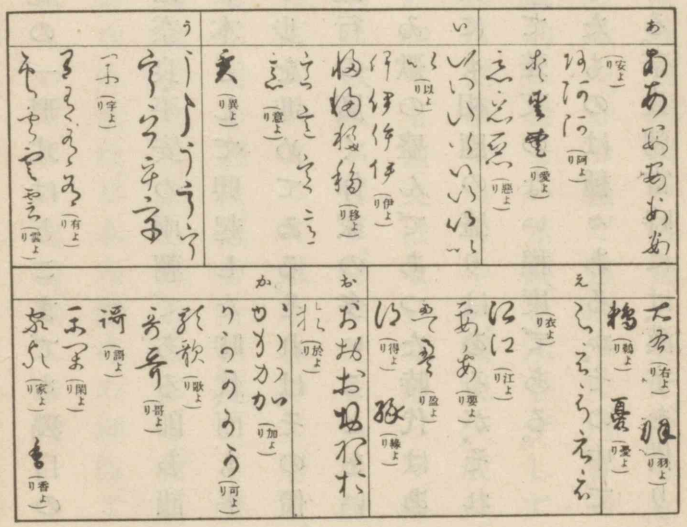
關はしてゐるのであるが、それは小變化・少差異にのみ止まつて居る。隨つて獨自の文化の一形式は、どこまでも獨自のものである。

この歌の殊に榮えたのは、奈良・平安の兩朝である。卽ち韻文の時代で、散文はそれらを本として興起した時代、而も平安朝時代は奈良朝時代に一歩を進めてゐる。それは、その價値如何といふ問題よりも、流行の廣く作家の多いことをいふのである。實に平安朝ぐらゐ歌の盛んであつた時代はあるまいと思ふ。この後の時代にも相應の盛りはあるが、それらはたゞ、平安朝の餘波と見て差支のない程度である。

この歌に伴なつて興起したものは種々あるが、その中で殊に著しいものは假名である。奈良朝當時には、漢字を借りて之を寫して居たのであるが、大體に於て畫が繁雜で、書く

のに手間を要するし、また國語をそれによつて正確に寫すのは、ことに困難である。それで、漸次、義訓・借訓等の用法を止めて、一字一音の制を採つて、音だけはよく寫せるやうにしたが、字畫の方面はやはり面倒である。そこで更に進んでそれをも略することを始めた。ここに於て片假名が出來た。

漢字には、楷體のみならず、行もあれば草もある。ことに草の宛轉たる趣致は、漸次柔かになり來つた歌の情趣



挿繪　假名の起り。





とよく一致し、且つ畫の數も少なく、比較的簡便である故に、楷體の略畫したものを用ゐると共に、これをも用ゐた。更にまたこれに止まらず、それらを略畫して愈簡便にした草假名はこれによつて起つて來た。

片・草兩種の假名が一時に併用せられた事は、種々の事實によつて證明せられる。しかし、歌が盛んになり、優美佳麗な情趣を十分に發揮するに伴なつて、それに適應する草假名の使用が盛んになり、それが遂に漢字の草體の意味から全然遠ざかつて、字々連系して遊絲の如く、流水の如く、紆餘曲折して當時の歌の趣致を遺憾なく表現するに至つた。隨つて、平安朝時代の歌が新日本思想の發露であると共に、草假名も亦、新日本文字の出現であると言ふべきである。而して歌が日本人の獨自の創造であると共に、假名はまた日本人

の特異の製作であると言はるべきである。殊に草假名に於て一層然るべきである。たゞその始祖が漢字であるから、外來の文化に起因するのが異なるのみである。吾人は歌を尊重すると共に、この假名、特に草假名を尊重せねばならぬ。

歌が當時の優秀國の韻文、卽ち漢詩と異なるが如く、草假名は漢字と同じくない。歌の天下は、ひとり我が國に於てのみ認められると同時に、草假名の世界も、また日本を基礎としてのみ存在する。歌を見るのに漢詩を見る目を以てすべからざると同時に、草假名を味はふに漢字の趣を以てしてはならぬ。勿論、根源をそれに有するのであるから、全然風馬牛ではない。一脈相通ずるものがあるのではあるが、その一脈を擴張して、唯一の大道とするに到ると、大なる誤に陷るのである。然るに、世間往々、草假名は漢字から來た、漢字と違

風馬牛　左氏傳に「唯是レ風馬牛モ相及バザル也」とある故事に本づきて相干渉せざるを云ふ。



つた假名はあるべきではないと言つて、ひたすら漢字を以て假名を律しようとする人のあるのは、株（くひぜ）を守り、舟に刻するの類で、思はざるも甚しいものである。

—（歌と草假名）—

株を守る　韓非子にある語。

舟に刻す　呂氏春秋にある語。

# 新制中等新國文

巻六　終



# 國語の構造（國・漢・英文法對照）

| 國語 | 漢文 | 英語 |
| --- | --- | --- |
| **一　品詞分類**<br>一　名詞（スベテ事物ノ名稱ヲ表ス）<br>名詞ニハ固有名詞・普通名詞ガアル。<br>＊數詞（事物ノ數量ヤ順序ヲ表ス）<br>二　代名詞（事物ノ名稱ノ代リニ指示スル）<br>代名詞ニハ人稱代名詞・指示代名詞等ガアル。<br>三　動詞（スベテ動作ヲ表ス）<br>動詞ニハ自動詞・他動詞ガアル。<br>〔活用〕動詞ハ未然・連用・終止・連體・已然・命令ノ各用法ニヨリテソノ形ヲ變ヘル。 | **一　品詞分類**<br>一　名詞（同上）<br>二　代名詞（同上）<br>他ニ關係代名詞アリ。（例）所、的（モノ）、「據（レバ）ニ我所（ガ）ヒ知（ル）……」<br>三　動詞（同上）<br>助動詞モ通常動詞ノ一類ニ數ヘラレル。（例）了（ル）、見（ラル）、爲（クリ）、是（レ）、「我是（ハレ）一個（ノ）人。」 | **一　品詞分類**<br>一　名詞（同上）<br>〔性 gender〕名詞ニハ男性・女性・中性等ガアツテソノ形ノ上ニ變化ヲ生ズル<br>〔格 case〕名詞ハ所有格ノ場合語尾ニ's'ヲツケル。<br>二　代名詞（同上）<br>關係代名詞アリ。<br>〔格〕代名詞ハ主格・所有格・目的格ニヨツテソノ形ヲ變ズル。<br>三　動詞（同上）<br>助動詞モ動詞ノ一類ト數ヘラレル。<br>〔時 tense〕現在・過去・未來及ビソレゾレノ進行形ト完了形トアリ。ソノ形ヲ變ズル。<br>〔法 mood〕直接法・假定法・命令法・可能法ニヨツテソノ形ヲ變ズル。 |

四 形容詞（事物ノ性質・形狀ヲ表ス）
〔活用〕形容詞ハ未然・連用・終止・連體・已然ノ活用形ヲ有スル。
＊形容動詞（形容詞ガ動詞「アリ」ト熟合シテ、否定・時間又ハ命令ヲ表ス）

五 副詞（動詞・形容詞及ビ副詞ヲ修飾スル）
副詞ニハ時間・比較・狀態・表決ノ副詞等ノ種類ガアル。

六 接續詞（語句・文章ヲ接續スル）
接續詞ニハ連接・逆接・追接ノ接續詞等ガ分タレル。

七 感動詞（心ニ感動シテ發スル）

八 助動詞（動詞ノ作用ヲ助ケル）
助動詞ニハ受身・可能・使役・敬語・打消・希望・時・推量・詠歎・指定・比況ノ助動詞等ガ擧ゲラレル。
〔活用〕助動詞ハ未然・連用・終止・連體・已然・命令ノ活用ヲスル。

九 助詞（他ノ語ニ添ツテ補助的ニ用ヰラレル）
助詞ニハ關係・接續・添意等ノ種類ガ分タレル。

## 二 措辭法

一 主語—述語
鳥ガ飛ブ。
鳥ハ飛ブ。

二 主語—客語—述語
彼ハ狗ヲ打ツ。（彼ガ）

三 主語—補語—述語
彼ハ家ニゐる。（彼ガ）

四 （イ）主語—客語—補語—述語
私ハ手紙ヲ彼ニヤツタ。
（ロ）主語—補語—客語—述語
私ハ彼ニ手紙ヲヤツタ。





四 形容詞（同上）
數量ヲ示ス語（數詞）ハ形容詞ニ入ル。

五 副詞（同上）

六 連詞（接續詞トホボ同ジ）

七 感動詞（同上）

八 介詞（名詞・代名詞等ニ附シテソノ間ヲ連絡スル）
介詞ニハ前置介詞・後置介詞ガ數ヘラレル。（例）由、於、以、之、
「由レ西往（キテユル）東流」

九 助詞（動詞・形容詞デハ未ダ充分デナイ語氣ヲ傳達スル）
助詞ニハ決定、叙述、感嘆、疑問等ガ分タレル。（例）也、焉、矣、歟、

## 二 措辭法

一 主語—述語
鳥飛（ブ）。

二 主語—述語—客語
他打（カレ）レ狗（ヲ）。

三 主語—述語—補語
他在（リ）レ家（ニ）。
（述語ハ不完全自動詞又ハ同動詞）

四 （イ）主語—述語—客語—補語
我教（ムシテ）汝出外國去（デアユラ）ー
（ロ）主語—述語—補語—客語
我送（ル）他（ニ）一本書（ヲ）。

四 形容詞（同上）
〔比較 comparison〕形容詞ハ程度ヲ表スタメニ變化スル。
＊冠詞（名詞ノ前ニ置カレル。定冠詞・不定冠詞ガアル）

五 副詞（同上）
〔形〕副詞ノ大多數ハ形容詞ノ語尾ニ ly ヲ附ケタモノデアル。
〔比較〕程度ヲ表スタメニ變化スルモノアリ。

六 接續詞（同上）

七 感動詞（同上）

八 前置詞（名詞又ハ代名詞ノ前ニアツテ他ノモノニ對スル關係ヲ表ス）

## 二 措辭法

一 主語—述語
A bird flies. (or. The) Birds fly.

二 主語—述語—客語
He beats a dog. (dogs)

三 主語—述語—補語
The boy became a solidier.
（述語ハ不完全自動詞）

四 （イ）主語—述語—客語—補語
I gave a book to him.
（ロ）主語—述語—補語—客語
I gave him a book.

新制中等新國文 全十册
定價各册 金五十八錢

編纂者 故三矢重松
右相續者 三矢夏井
補訂者 鳥野幸次
補訂者 折口信夫

發行兼印刷者 東京市神田區美土代町十八番地 株式會社 文學社 代表者 小林竹雄

印刷所 東京市本郷區真砂町三十六番地 日東印刷株式會社

大正十年十月廿一日印刷
大正十年十月廿四日發行
昭和四年二月十五日訂正六版印刷
昭和四年二月十八日訂正六版發行
昭和九年十一月三十日訂正七版印刷
昭和九年十二月三日訂正七版發行
昭和十年十月十日訂正八版印刷
昭和十年十月十六日訂正八版發行
昭和十二年七月廿三日訂正九版印刷
昭和十二年七月廿六日訂正九版發行
昭和十三年一月廿五日訂正十版印刷
昭和十三年一月廿九日訂正十版發行

不許複製

發兌 東京市神田區美土代町十八番地 株式會社 文學社
電話神田三五一一番
振替口座東京三八七八番

關西一手販賣所 大阪市西區靱北通り二丁目 株式會社 盛文館
電話土佐堀一五二三番
振替貯金口座大阪七四三番

# 小林典